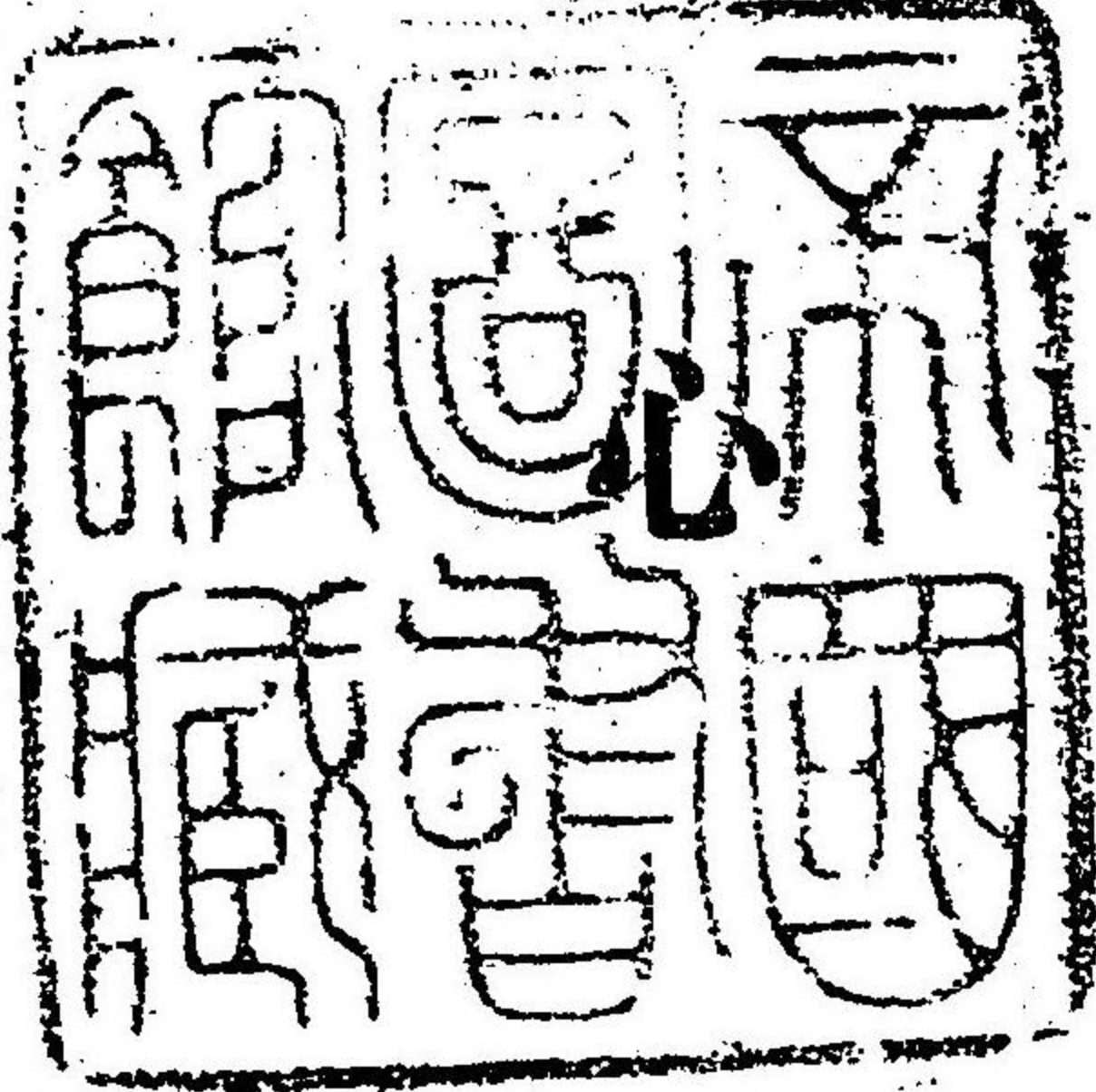


132-1104



ア
ン
ド
レ
イ
エ
フ
著
上
田
敏
譯

明治
42 6 24
内 齋



Mr. J. J. J. J.
109-

序文

レオニイド・アンドレイエフは千八百七十一年に中央露西亞
オオレルに生れた。まだ中學に通ふ頃、急に父を失つて以來、貧窮
のあらゆる苦痛を青年の時に嘗め盡した。はじめ聖彼得堡大學
に聽講したが、二日間も食無しに通した事が間々あつた。傍ら文
學に身を入れて、諸種の新聞雜誌へ投書して見たが、勿論何の報
酬も望めない。掲載の榮をさへ得なかつた。其後、生活費が少し廉
いと聞いて、莫斯科大學へ移つて勉學しても、依然として饑に苦
んだので、二度までも自殺を謀つた。只幼年の頃から好きであつ
た繪を描いて鬻いだので、辛らく口を糊したといふ。一枚五留乃
至十留で肖像を描いた。文學よりは、何がしか金になるからまだ

好い。

千八百九十七年終に辯護士の免狀を得て莫斯科に開業した。さつぱり依頼人が無かつた。已むを得ず、法廷記事を新聞へ寄稿して生活してゐた。傍ら年來の好物である文學には意を斷たなかつた。

はじめて文名を揚げたのは『沈黙』これはもと……』の二篇が聖彼得堡の文學雜誌へ載つた時からである。是は青年のおぼつかない試筆でない。心情の描寫、運筆の簡勁、宛然大家の風がある。譯者は千九百三年(明治三十六年)の春、何氣無く、アンドレイエフの短篇集を東京の一書肆で購つて讀んだ。ゴルキイの新星が光芒を放つてゐる頃で、まだアンドレイエフの名は西歐羅巴の文界に喧傳しなかつたが、人間胸奥の底知らぬ湖を示して、そこ

に碧潭がある、深淵がある、表は可愛らしい漣の小皺が見えても、底には恐ろしい渦が湧きかへつてゐるといふ意を、此作者は十分に描いてゐる人は少ないと思つた。そこで巻頭の『これはもと……』を始めとし、『ブツヤ』『歸宅』『嘘』『旅行』『沈黙』『心』迄皆讀んだ。稍あつて第二集も發行され、文學雜誌へ文名の聞える頃になつて、『紅笑』を始め、『崖』『石垣』『骨牌遊』『霧』『地下室』『窓』其他の數篇、更に後れて、『總督』『ソサカ』『外國人』『贈物』『汽車を待つ間』『ベルガモット』『ガラスカ』『カブルコフ』『セルゲイ』『セルゲイギチ』なども讀んだが、中にはあまりに悲惨を極め、凄蒼を逞くするので、殆ど巻を掩ひたくなるのがある。唯、わりに近頃の作である短篇『甦りの者に世は美しい』といふのに、一種清明の光を認める。

饑寒といふ學校で教育された此作家は心の訓練といふ事を

四
知つて居る青年の客氣に乗じて情熱の文を草したので無い又は單に矯激の言を爲して、口角泡を飛ばすやうな取亂した文學に一時の快を食つたのでは無い。天稟の才分へ嚴肅な節制を加へて、熱情と冷頭とは珍らしく權衡を取つてゐる。それで此作家の特色といふのは『恐怖』といふ樂旨に、種々の變調を加へてゐるのにある。こゝに恐怖といふのは、自然律に反する大事變を見て驚くといふのでは無く、又は特別に珍らしい大危險に會つて恐れるのでも無い、寧ろ日常の事件中よく考へれば非常に悲惨な、幽玄な、由々しい事が在るのを示すので、即ち生死の大不可思議に潜んでゐる驚心駭目の事實を抽出して讀者に示すのである。要するに心理の描寫殊に病理的心理の描寫が得意の題目である。例へば『心』の主人公ドクトル・ケルジエンツェフは果して狂か

否かといふ問題が、實際聖彼得堡で催した精神病學會議の議事に上つて、専門家中終に意見が一致しなかつたといふくらゐ、此作家は内心の秘密を探るのが旨い。

ギクトル・ユウゴオはポドレエルの『惡の華』を評して君は『新しい戦慄を造り出した』といつた。又ポドレエルの心服したボウも實は新戦慄を造り出したのであるが、それは常に異常の境遇、光景を設けて、人に恐怖を興へる。アンドレイエフは之に反して尋常の場合、普通の人間の話をして、世に珍らしい新戦慄を創作したのである。

明治四十二年六月

東京 上 田 敏

目次

心 一

これはもと 一八一

クサカ 二五七

旅行 二九六

心

千九百年十二月十一日醫師アントン・イグナチ
エ平チケルシエンツェフは人殺をした。犯罪當時の模
様また之に先つ種々の事實までが、此犯人の精神
状態にどこか異常の點がありさうたといふ疑念
を起させた。

診断の爲、エリザベト精神病院へ送られて、經
験のある多くの専門家から詳細に嚴重に取調を
受けた。先日物故したシムニツキイ博士も鑑定人

の一人であつた。

入院一月の後、ドクトル・ケルジエンツェフは自分で起草した始末書を鑑定人の許へ提出して、此事件の顛末を説明した。次に掲げるのが其書類である。審問の當時に集つた他の材料と共に、法醫學上の鑑定に基礎となつてゐる。

二

第壹號

鑑定人諸君、自分は今日が今日迄此事件の真相を陳述しなかつたが、今己むを得ず逐一暴露する事になつた。茲に始めて諸君は、此事件が局外者の見るやうに單純で無い事に氣が付かれるであらう。これは單に狹窄衣や鐵の鎖で方が付く行爲では無い。それよりも非常に重大で、又諸君には大に興味のある或物が此裡にあると、自分は確信する。自分の殺した男、アレクシス・コンスタンチノヴィチ・サギエロフは、中學以來の友人で、志す學問は互

三

に異つてゐたが、大學に進んでもなほ交際を續けてゐた。自分が故人を愛してゐなかつたとは誰も言へまい。平常から自分とは氣のよく合つた男で、實はこれほど親密な知合は他に無つた。然しあの男は人好のする性にも拘らず、尊敬の念を起させ、人物では斷じて無い。氣象が柔和で、不思議なく、謙遜で、思想や感情が妙に不定であつたり、其常に徒氣の判斷力は、とかく極端に陥り易く、又滑稽の解らない事が、あの男を女か子供のやうに思はせた。傍の者も爲に隨分と迷惑はしたが、實に

人間の心は理屈に合はぬ——同時に又之を愛して、其瑕や之を愛する所以の分疏を尋出して、藝術家風の男だと評した。此一見何の意味も無い名稱があの男の罪を全く免じてゐる。通常人が行れば悪い事でも、あれが行ると、何とも無い事、又は善い事となる。此曖昧な語の勢力は、實に偉大なもので、自分も一時は、他と共に、アレクシスの小さい瑕を心に免じてゐた。自分はこゝに小さい瑕と言ふ。何となれば、あの男には瑕のやうな物にしる、凡て大きい所が無いからである。其證據には、あれの文學上

の作物を見るのが一番早い。實に揃ひも揃つて下
劣な平凡の事ばかり書いてある。始終新らしい才
を發見しようとして焦つてゐる。近眼の批評家たちが、
いかに褒めようと到底徒目だ。成程彼奴の書いた
物には綺麗な所はある、何と無く佳い所もある。丁
度あの男自身が綺麗で、何と無く佳いのと同じや
うだ。

アレクシスは三十一で死んだ。即ち自分より彼
此一年半ばかり若かつた。

アレクシスには妻がある。諸君が、若しあの細君

の未亡人になつて喪服を着たのしか知らないの
なら、とても昔の姿を想像する事が出来まい。慙然
に餘程窶れて來た。頬の血の氣も褪め、顔の地肌が
皺腐になつて、色香の衰へた所は、まるで使古るし
た手套のやうだ。又あの皺と來たら、今は皺だ、一年
も経てば溝になる、深い畝になるだらう。して見る
と随分夫を愛してゐたものだなあ。眼も今は光が
消えて、莞爾ともしないが、以前はどうして、始終莞
爾もので泣く可き時にも笑を含んでゐたものだ。
不圖した拍子で、この間自分はちらりと豫審の時

に見たばかりだが、あの變りやうには吃驚した。細君は恨の一瞥をも與へる事が出来なかつた。愍然な女ではある。

唯三人だけ、即ちアレクシスと自分とタチヤナ。ニコライエヴナだけの知つてゐる事だが、實は五年前、即ちアレクシスの結婚の二年前、自分はタチヤナに結婚を申込んで、見事拒絶されたのである。いや、然し、待て、事に依つたら、之を知る者が、此三人ぎりとは、自分の愚な考かも知れぬ。タチヤナだつて男や女の友達が十人やそこいらはあるたらう

し、以前ドクトル・ケンジュツフが結婚を申入れて、不見識にも刎られたと知つてゐるだらう。先方では覺えてゐるか、どうか知らないが、あの時に女は笑つたのである。あの頃はタチヤナも何ぞの事によく笑つた時代であつたなあ。然し諸君、此事はとうぞ先方へ傳へて下さい。九月の五日にタチヤナは笑つた。そんな事は無いと言つたら、いや言ふだらうが、然し確に笑つたと傳へて下さい。遂に泣いた事の無い、何物をも恐れぬ強健の自分も、女の前に出た時、ぶるぶる震へた。すると女は唇を喰

十
締めてゐる。抱寄せようとして、腕を廣げると、女は眼を上げた。其眼が笑つてゐた。自分の手は途中に止つた。女は失笑した。長い間、笑ふの、笑ふの、思ふ存分に笑つたが、とうとう詫びて言ふには、

失禮致しました。御免遊ばせ、と言ひながら、眼は矢張笑つてゐる。

そこで此方も亦微笑した。たとひ女の笑つたのは赦しても、自分が微笑したのは、どうしても堪忍ならぬ。九月五日午後六時、聖彼得堡標準時であつた。こゝに標準時と言へるのは、丁度其時二人は某

停車場の昇降臺に居て、大時計の白い蠟面に見え、る黒い針の位置を自分は判然記憶してゐるからである。針の一は上、もう一は下になつてゐた。時にアレクシス・コンスタンチノギナも丁度正六時に殺された。不思議な暗合だ。然し聰明の人には様々の事思はせる暗合である。

自分を此病院に收容する爲に數へ擧げた原因の其一は、犯罪の動機が皆無であると言ふのだが、そら、これで動機の如何が解りましたらう。無論嫉妬では無い。それには第一犯人が思慮の淺い血性

の人でなければならぬ。即ち理性の勝つた冷かな自分とは正反對の精神状態を豫想せねばならぬ。して見ると或は復讐か知らさやう。まあ復讐として置く、元來人の曾て知らぬ新しい感情でも之を言表すには古い語を使ふものだ。さて又こゝに一言せねばならぬのは、タチヤナが其後自分を瞞した事で、これは常に自分が快からず思つてゐた。アレクシスの氣質をよつく知抜いてゐる自分は思つたのに、さぞタチヤナは結婚してから不幸な目を見るだらう、此方の事を今更惜しく思ふだらうと考へてゐた。それでこそ自分は非常にアレクシスに勧めて、其既にタチヤナを愛してゐるのを懲憑けたのである。あの男の横死の一月前にも

——實に僕の幸福は全く君の賜物だ、と言つて——
 ねえ、タチヤナと妻の方へ向くだらうでは無いか。
 女は此方を見詰めて——さうです、と答へながら、
 眼は微笑した。そこで男に抱寄せられると、二人は
 聲を立て、笑つた。自分の前では、かう遠慮無しに
 してゐる男は附加へて、

——ねえ、君、君はつまり籤を引損なつたのさ。

此場處柄を辨へぬ悪洒落は、如何にも氣が利かない。爲にあの男の命はまる一週間は縮つた。實は十二月十八日に殺す積であつたのである。

この通二人の生活はいかにも楽しさうであつた。殊に嬉しさうなのはタチヤナであつた。男はさほど熱心に愛してゐなかつた。元來が眞の深い愛を感じ得られない奴で、實は他に極好きな仕事があつたといふのは文學である。其面白味が双棲の室から度々男を遠ざけたのである。然し女の方では、只管夫に愛を注いで、外に氣が散らぬ外に命は

無い。それにあの男はあまり、丈夫の方でも無し、よく頭痛がしたり、少からず不眠症に悩んでゐたが、女は又其看病をして氣愧しい色々の駄々のお守をするのが、何よりの樂であつた。一體、女が人を愛する時は、其人格が完く没くなるものである。

かくて毎日、自分は女の莞爾した、楽しさうな若い、美しい、心配の無ささうな顔を見た。それで、はい、此幸福も畢竟原因は自分に在ると始終思つてゐた。もと此女を放蕩の夫に添はせて、先に求婚を斷つたのが、どんなに損であつたかと思知らせて

やらうと謀つたが大當違これでは反對に愛する
夫に呉れてやつた事になつた妙な羽目になつた
ものである。女の方が夫よりずつと物が解つて
て自分と話をするのが好であつたが、さんざ四方
山の談話をした末に、どうも怪しからん、いそいそ
とさも嬉しさをうに夫と同衾しに座を立つて行く。
アレクシスを殺さうと、何時思立つたのか、記憶
してゐない。此考が自分と共に生れたかのやうに、
如何も古馴染であつた。一つタチヤナを不幸にし
てやらうと思つた。又アレクシスに取つても、もつ

と危く無い他の手段も随分考て見た事もあつた。
— 自分は不斷から無益の殺生や殘刻の行を好ま
ない。— 幸自分はあの男の心を左右し得るから、他
の女に倅らせたり、大酒家にしてやる事も出来る。
元來彼奴は少し酒がいけ過ぎる方であつた。然し
そんな策は役に立たぬ。夫が他の女に關係しよう
が、酒臭い體で抱付かうが、女は依然として幸福に
暮すやうに勉めるくらゐ、そつこん打込んで。何
が起らうと、もうあの男の奴隸になつてゐる。世の
中にはさう言つた奴隸のやうな人間が澤山居る。

畢竟ずるに、奴隷なればこそ、其主人の外には、決して他の勢力を理解もせず、見別もし得ない。世には利口な氣立の良才氣のある女はある。但し正義の觀念を持った女は無い。

茲に正直に告白して置く事がある。——尤もこれは情狀酌量を望んで言ふのでは無い。——そんな物は要らぬ。いかに順當に正確に此計畫の胚胎したかを示す爲に言ふのだが、實はこの殺して了はうと心の中で宣告した男に對して、永い間、憐愍の情があつた事である。まづは死に先づ數分間の恐怖

を察してやつて、密に愍然に思つた。もう一つ愍然に思つたのは、——これは恐らく諸君に解るまいが——これから打割らうとした頭の骨だ。生命のある、調和のある、活動のある有機體には、特殊の美があるもので、死は老や病と同じく、とにかく一種の醜である。ずつと以前の事で、今に折々思出すが、或研究に従事してゐた時、釣合の良い足の丈夫な若い犬を手掛けたが、實驗上の必要に迫られたとは言へ、生きながら、其皮を剥くのが、如何も自分には辛かつた。程経て後も思出すと不愉快であつた。

二十
若しアレクシスが、あんなに病身で脆弱く無つ
たなら、或は殺さずに置いたかも知れぬ。何しろ今
だにあの綺麗な頭は惜しい氣がする。諸君どうか
かうタチヤナに傳へて戴きたい。あの頭は美かつ
た、實に美かつた、只眼には點の打處がある、青白い
眼で、光も張も無つた。

又批評家の言ふ如く、彼が眞に大詩人であつた
なら、殺さずに置いたらうと思ふ。人生は實に暗闇
だらけた。其道を照す才能は従つて大切である。滔
々たる痴漢愚物幾百萬の存在を許すには、世に珍

らしい才能を尊んで、貴重な珠玉のやうに愛護せ
ねばならぬ。然しアレクシスには全く此才能が無
つた。

今は文藝評論の時機では無いが、試に故人の作
物の精神を調べて見給へ。とても人類に必要な物
とは思はれぬ。肥滿の爲、運動が出来なくなつた一
部の人士には氣に入らう。然し一般の人間又は宇
宙の秘密を探らうとする吾等には、薩張面白く無
い。文藝は思想と才能との力で、新しい生命を創
作す可きものだのに、サギエロフは唯舊い生命の

描寫に満足して、其裡に潛んでゐる意味を抽出す
 事さへもしない。唯自分の好きな作物が一ある。あ
 の「秘密」と題する小説だけはあの男が眞に前人未
 發の境地に近づいた作であるが、これはほんの例
 外さ。殊に至極面白からぬ事が見えて來たと言ふ
 のは、アレクシスが眞にもう種切になつて來た事
 で、人生を嚙締めて、之をもりもり切碎く牙が幸福
 の爲に皆無になつた。彼も屢々自分に其疑惑を打
 明けたが、成程これは根據がある。自分はあの男が
 未來に亘つて建てた計畫を一々委しく調べてみ

たが、彼を哀惜する世の崇拜者よ、安心し給へ、あれ
 からもう決して偉大斬新の物が出る見込は無つ
 たのである。アレクシスの親近者中、あの細君だけ
 が夫の才の下坂を見なかつた、又終にそれが見え
 なかつた。何故といふに、あの女は遂ぞアレクシス
 の書いた物を読んだ事が無い。實は或時極少して
 も宜いから、眼を明けてやらうとしたら、此方をて
 んで嘘付と見做した。女はじつと自分を見詰めて、
 其座に人の居無いのを見極めた後、
 —もう一つ、主人の善くない所があるので御座

いませう。

—何です。

—はい、私の夫であつて、それを私が愛してゐるといふ事でせう。一體主人があんなに貴方を好きでなければ……

と言つて、少し躊躇するから、此方で後を補してやつた。

—私の出入をお禁めてせう。

女の眼には笑が少し浮んだ。さも無邪氣な微笑をして物靜かに、

—いゝえ、なんのお禁め申すなんて思ひは致しませんわ。

どうも奇體だ。遂ぞ身振にも言語にも、自分が今にあの女を思つてゐるとは表さなかつたのに、然し、善し、向で察してゐれば尙更好都合だ。

人命を奪ふといふ事實其物は毫も氣にならぬ。勿論法律が嚴刑に處する犯罪だとは承知してゐる。然し人間の行爲は殆皆罪では無いか。これが解らぬ者は餘程の盲目だ。神を信じる者には、神に對する罪、其他の人には人間に對する罪、自分のやう

な者には、自己に對する罪である。一旦既にアレクシスを殺す必要を認めながら、其計畫を實行せず居るのは、一大罪惡と言つて宜からう。大罪小罪の區別を設けて、殺人を大罪惡とするのは、憫笑すべき人間習慣上の虚偽としか見えぬ。それは自己に對して罪を犯すのだ。責任を避ける爲、われとわが背後に隠れようと骨折るやうなものだ。

自分は自己を恐れてゐない。これが何より肝心だ。殺人者、犯罪者に取つて、恐いものは、警察の搜索や裁判所では無い。唯自己である。膽力である。或一

種の傳統に據つて教育されて來た全身の有力な反抗である。諸君、諸君はあのみじめな死方をしたラスコルニコフを記憶してゐられるだらう。所があれに似た男が世間には澤山居る。自分は久しく此問題に意を注いで、深く研究して見た。人殺の後にはどんな心持だらうと想像して見た。自分は完全に冷靜を保ち得たとは言はない。苟も物を考へる人、即ちあらゆる成行を豫知する人に全然落着いて居るとは、出來無い相談だ。然し自分は過去の履歴が供給する種々の前提を蒐め、意志の力をも打

算し、膽力の鞏固や、流俗の道德に對する深い心か
らの輕蔑等を考に入れて見て、終に此計畫の好結
果に就いては比較的の確信を養ひ得たと思ふ。こ
ゝにわが一生中の興味ある一事實を報告するの
は、敢て蛇足であるまいと信じる。

自分はまた第五年級の學生であつた時、友人の
委託金の中から十五留を着服した事がある。會計
方の勘定違だと、言免れたが、誰あつて之を疑ふ者
が無つた。これは金に窮して、物持から奪つた尋常
の盜では無く、他の信任に負いて、貧者、友人、學生の

懐から、財産のある者が奪つたのである。だから誰
も自分の言を信ぜずに居られなかつた。恐らく此
行爲は親友を殺した今の罪よりも、諸君の眼には
一層卑む可き事だらう。ね、さうではありませんか。
それからどうした。今に記憶して居るが、此まんな
と盗取つた手際の見事なものには自分も頗る嬉し
かつたので、じつと正面に友人等の眼を視詰めて、
遠慮無く大膽に欺してやつた。自分の眼は黒い、涼
しい、心置の無い眼だ。此眼だけでも人は直に自分
を信じて了ふ。此時少しも良心の責を感じなかつ

たのは、自分の最も得意とする所で、抑も始からこれを自身に示してやらうと思つたのである。今だに思出すと愉快で堪らないのは、此盗んだ金で、立派な無駄な料理を食つた事で、其時の獻立や食欲の盛であつた事も歴々と覚えてゐる。

今度はどうだ。良心の呵責があるか。少しでも行為を悔ゆる所があるか。否、全く無い。

自分は今心持が悪い。何とも言へ無い厭な心持だ。恐らく世の人の曾て感じた事の無い厭な心持だらう。髪の毛も爲に白くなつた。然しそれは全く

別の事である。それは別だ。恐い、恐い、思もかけぬ事、恐しいほど單純で、殆信じられ無い一種の感である。

解決す可き問題はかうである。アレクシスを殺さなくてはならぬ。それで殺したのが自分である。と、タチヤナが知らねばならぬ。然しそれと同時に法律上の罰が及ばないやうにと言ふのだ。罰が来ようとも、勿論タチヤナには左程満足を與へないから、無益であるが、それは先づさうとして、何しろ自分は牢に行くのが厭だ。けに面白の浮世かなだ。薄手の玻璃の盃に、黄金の美酒が沸騰してゐるのは快い。乾淨した床の上に眠るのも好い。春は新鮮

の空気を呼吸したり、華やかな落日を眺めたり、面白い筋の通つた書を読むのも好きた。第一、自分で自分が好きた。此筋肉の力、此精覈透明の心の力が好もしく、自己の獨立も好きた。如何なる好奇の眼も、曾て此心の底を見抜きえないのが嬉しい。わが心の底土、此恐しい深淵の縁に立てば、眼も眩むばかりである。人のよく言ふ生の疲といふ事は理解が出来ぬ。自分は生きて居るのが樂だ。生命の奥に潜む大秘密を探すが好きた。復讐の恐しい渴望、人間萬物の遊戯、又はこれより生ずる猛烈の大歡

樂を好む。

自分に尊敬の念を起させる者は、世の中に獨自分あるのみだ。どうしてさういふ人物を半などへ送られよう。此種の人物に、無くて協はぬ變化の多い、豊富な意味の深い生活は、牢の内では營まれまい。又鑑定人諸君の見地から言つても、自分が半へ行くのを嫌ふ理窟は立つと思ふ。自分は醫を開業して成功してゐる。相當の財産もあるから貧民には施療をしてゐる。確に自分は殺されたあの男よりも世を益した積だ。

加之法網を潛る事は造作も無い。注意を惹かすに人を殺す法はいくらもある。殊に醫者として自分はその中から一を選ぶ事は容易だ。實は一度考へて見て、其後も永くやつて見る氣のあつた一の法があつた。それはアレクシスに治りにくい厭な病の病菌を注射する事であつたが、此策の不便は素より明白だ。當人の長い苦惱はともあれ、何と無く全體が非美術的で、不手際で、俗で、少しやり過ぎて見える………迂遠い所がある。第一タチヤナは夫の事だと、病氣まで好きになるかも知れぬ。殊に困

るのは誰が確に夫を殺したか解るまいと思つて
當惑した。然し氣の弱い者にこそ障碍が恐く見え
るが、自分のやうな鍛の人は、却つて之に誘はれる
ものだ。

僥倖といふ賢者の大援軍は自分を助けて呉れ
た。此一瑣事には特に諸君の注意を求め、鑑定人
諸君、これは實に僥倖であつた。即ち意志とは全く
關係の無い外來の或物が、後日の基礎となり、思付
となつたのである。或新聞の雜報欄に(此新聞が若
し豫審判事の手元に往つて居なければ、まだ宅に

残つて居る筈だ)金を盗んだ或會計係が、急に癲癘
の眞似をして、發作中に盗まれたのだと申立つた
話が出て居た。其男は弱虫で、遂に自白して、賍金の
有處まで白狀して了つたが、考其物は決して悪く
ない、實行も出来る。自分も一つ狂氣の眞似をして、
所謂精神錯亂中に、アレクシスを殺し、さて「治る」。こ
れが直と心に浮んだ名案であつた。然しこれが纏
つた判然した形を取る迄には、大分時間と勞力と
が要る。其頃は自分もまだ精神病學をよく知らな
かつた。之を專攻しない醫者は皆さうである。そこ

で自分は斯學科に關する凡ての書を通讀して熟考すること一年終に此計畫は全く實行し得られるといふ確信を得た。

鑑定人が直に注意する第一の點は遺傳の力である。——然るに喜ぶ可し自分の遺傳と希望とは一致してゐる父は大酒家で、其弟即ち自分の叔父の一人は瘋癲病院で死んだし、歿なつた一人の妹ア
ンナには癩癩の病があつた。成程母方は皆良履歴ばかりだが、人の能く知る如く、瘋癲の病素一滴で、一家族全體を毒するに足りる。自分の體の丈夫

な所は母方に似てゐるが、眼に立たぬ二三の變な所があるから、之を利用される即ち平生から總じて閑靜な處が好きだ。——これは單に精神の健全を證するもので、自分は元來無意味な雜談よりも讀書や獨座の方が好きである。——然し之を病的の嫌と見せかけける事も出來よう。又俗な肉體の快樂をあまり好かず、萬事冷淡な處は變性の徵候とも辨ぜられるし、一旦思立つた事は是非とも行遂げるといふ一徹心——自分の豊富な生活中其例は幾らもある——これには鑑定人諸君の用語に従つ

て、偏狂壓迫強迫觀念等の恐しい名稱を與へる事も出来るだらう。

斯ういふ工合に此狂言の下地は格別好都合になつてゐた。精神病の靜的方面は既に存して居るから、これからは其動的方面に徙るばかりだ。天の與へた偶然の材料に二三の巧な助筆を加へれば、立派な狂氣の圖は出來上ると、それから先の事迄想象して見たが、それは抽象的に考へたのでは無く、十分活々とした形で心に浮べて見た勿論くだらぬ小説を書いてゐるのでは無いが、元來自分に

は少からず藝術心と空想とがあるらしい。

自分は充分此役を演じられると言つた。素より自分には矯飾の性があつた。これといふも内心の自由を得むが爲に用ゐた一手段である。中學時代でも、よく友情を伴つたもので、親友の如く同輩と腕を組んで廊下を往來して、心から打解けたやうな巧な語で鎌を掛けると、先方も打解けて心の内を吐露する。充分先方の下劣な心を密に蔑視んでやつて、わが内心の自由と勢力とを得意に感じた後、其人から段々遠ざかるやうにした。宅に居ても

同じやうだつた。今に古風の家では客に別の食器を出す如く、自分は夫々の人に對して、特別の笑顔、特別の言語、特別の打解け方を用ゐた。見て居ると、人間といふ者はわれとわが身の爲にならぬ下らぬ事を大分行る者だ。それ故若し自分が本音や生地を人に見せたなら、世間と同じやうになつて、彼の爲にならぬ事、下らぬ事に打克れて了ふだらうと考へた。

自分には心に蔑視して居る人を陽に尊敬し、憎い人をも抱く事が常に好きだつた。精神の自由は全

く此庇蔭で保たれて、他の主人と成りおふせたが、其代自分は決して自己を欺かない、況く世に行はれて人間を生活に隷屬させるこの自己を欺くといふ事は決して行らなかつた。他に向つて伴れば伴るほど、自己に向つては容赦しない。これは普通人の減多に誇れない藝であらう。自分の心の中には非常な名優が隠れてゐるやうだ。此優人は其扮する所の人物と、時には全く合一して、其仕草が如何も自然だが、又冷やかな一刻も休の無い、理性の制御を加へる事も出来る一體

自分は讀書の際、書中人物の心理に没入し得るの
 で、斯う言つても諸君は信じまいが、嘗ては「ア
 ル・トムの小舎」を讀んで熱涙に咽んだものだ。而も
 それは成年になつてからである。文明に依つて精
 練され、何事にも適合し、限無く化身し得るわが心
 の逞しさは眞に感歎す可きものでは無いか。宛も
 同時に一千の生命を送る如く、あるは深く地獄の
 暗穴道に降り、あるは高く清明の巔に馳上つて、そ
 こより一目に全宇宙を收覽する事が出来る人間
 にして若し神となり得可くば、其玉座はまさに書

籍である………

全くさうだ。時にそれで今思出したが、此病院内
 の事で一寸諸君に訴へることがある。自分は床に
 就されるや否や、筆寫をしたくなる。是非書かねば
 濟されぬ。すると戸が明いてゐて、狂人の怒號を聞
 かされる。咆えるわ、咆えるわ、恠へきれなく、咆える。
 あれは全く正氣の人間を虐める策だ。實は始から
 狂人だつたと自白させる爲に、あれで狂氣にしよ
 うとするのだ。又蠟燭ぐらゐるは支給しても宜から
 うでは無いか。是非此電燈で眼を悪くさせる必要

がどこにある。

さて本論に立戻らう。實は自分も曾て舞臺に上つて見ようかとも思つたが、終にそんな馬鹿げた考は捨て、了つた。あれは假託だなど皆に知れるのでは、價値が失くなる。また本職の俳優が貰ふ廉物の月桂冠はあまりぞつとしない。然し諸君は自分の妙技をほゞ認められるだらう。今に愚人どもは自分を目して正直な人としてゐるのでも大概解る。いや、今愚人と言つたのは、つひ口が滑つたので、自分は不思議と、常に愚人では無い、却つて智慧

のある人を欺くのが名人であつた。唯これに劣る二種の生物、即ち女と犬とは、どうも旨くいかな

い。
諸君、あのマチヤナ・ニコライエヅナは、此方の思つてゐるのを決して信じなかつた。惟ふに現在、夫を殺された今日でも信じてゐまい。マチヤナは斯う考へてゐる。あの人は私を愛してゐるのでは無い。私がアレクシスを愛してゐるから殺したのだ。事に依つたら、此不合理の理屈が、あの女には理に合つた。尤な事に見えるのかも知れぬ。怜悯と言は

れる女でもこれだ。

狂人の真似なんて、決して難しくは無^い。主要徴候の一部は其道の書に載つてゐるし、他は自分で創作すれば宜い。名優が其持役を取扱ふ風に倣つて、此他のものを見物に創作して貰ふのである。公衆は二三の頗る曖昧な特性を以て、活きた人物を組立てる事を書物や演劇から夙に教はつてゐる。これには無論少からぬ缺陷はある。従つて後日鑑定人の調査を受ける時、一寸危なさうだが、實は大した危険の無いものである。精神病學の廣大な範

圍には、まだ仲々研究の行届かない部分が多く、暗い隅つこや、偶然に起る變化や、獨合點の思付に任して置く所が澤山あるから、自分は大胆にも、一か八か、運命を掌に載せたのである、かういつても、どうか諸君の感情を害さないやうに、これは敢て諸君の學術上の權威を傷けるのでは無い。唯諸君は緻密な論理的の議論を尊重する人として當然わが此説に従はれるであらうと信じる。

………嗚呼、やつと咆えるのが已んだ。實に辛かつたぞ。

あの策をまだ計畫中の時から、とても狂人には
浮ばない思想を自分は持つてゐた。自分は此實驗
には恐しい危険の伴つてゐるのに氣が付いた。委
しく言はずと、先刻御承知だらうが、人間の頭腦に
狂氣の虞が少しでも侵入して來るのは、火藥庫の
中で火を點すよりも危ないと自分はよく知つて
ゐた。然し勇氣ある人には、危険其物が既にどこ
か面白いのである。

透明正確のわが心は、切先の尖つた鋼鐵の劍の
やうに事件の經緯を縫ひ突き刻んで、操縦意の如

くになる。而も其柄は常にわが手の中に、手練秀で
た劍術家の鐵のやうな手の中にある。靱かて、活潑
で、手速いわが心、實に好もしいわが心、これぞわが
奴僕、わが力、わが唯一の寶。

……また咆出したぞ。もう筆寫は出來ない。實
に人間の泣聲ほど凄いものは無い。これ迄随分恐
い音も聞いたが、これが何より恐しい慘憺たるも
のだ。人間の咽喉から出る猛獸の聲ほど荒涼じい
ものが他にあらうか。何とは無しに猛烈な、又怯々
した、氣隨な意地らしい所があつて、口は歪む、顔の

筋は紐のやうに張る、犬のやうに齒を剥く、口の穴の暗がりから變手古な聲が迸しつて、呻る、咆える、からから、笑ふ、よゝと泣く……：

實以て自分の心は上に述べたやうだ。時に序ながら一言するが、諸君は此書體を調べたらう。どうかこれはあまり重大視されぬやうに願ひたい。時々震へてゐて、形の崩れたものもある。實は久し振で筆を執つたのだし、又睡眠不足で、大分衰弱してゐるから、少しは震へてゐるものあらう。然し以前もかういふ事があつた。

第參號

カルガノフの家で起つた劇烈な發作の性質はこれで諸君にも解つたらうと思ふ。あの第一回の試験は豫想外の成功で、席上の人々は既に前から斯んな事にならうと豫期してゐたやうだとも言へる。正氣の人が急に氣が觸れても、それは常に覺悟す可き當然の事に思つてゐるやうだとも言へる。此時誰も驚かないのみならず、名々の想像を加へて、自分の演技に色を添へて呉れた。自分のやうな良い一座に取巻れた頭取役者はまたとあるま

い。實に無邪氣な質撲な愚な信じ易い群衆である。諸君はそれから色々聞取られたらうが、其時自分は恐しく蒼い顔になつて、額にはしつとりと汗が、あの冷汗が流れて、黒い眼の中に狂亂の火が燃立つたと言つたらう。皆が其觀る所を自分に言つて聞かせた時、自分は黙々として、如何も萎げた風をしたもの、心中實に得意と幸福と輕蔑とで震へるくらゐ嬉しかつた。

此晩の會へはタチヤナも其夫も出席して居なかつた。——諸君はこゝに氣が付かれたらうか知ら。

これは決して偶然では無い。自分は第一タチヤナを驚かせまい、殊に用心させまいとした。若し此世にわが心中を察し得る人があるとすれば、それはあの女である、あの女一人である。

一體此事件は一として偶然に出た所が無い、あらゆる細目は其最も微小な點までも嚴密に研究を盡したのである。多勢の人が會合して、多少酒氣を帯びた席上を發病の場所を選んで、自分は食卓の一端に座を占め、燭臺の所から遠ざかつてゐた。火事を出したり、顔に火傷をする積では無かつた。

自分の直傍へハエル・ペトロギナ・ポスピエロフを座らせた。夙から一つ何ぞ不愉快な目を見せてやらうと考へてゐた、いけ好まない、あの肥大漢は、物を食ふ時、殊に胸を悪くさせる。始めて彼奴が物を食ふのを見た時、成程食事といふ行爲も時としては不道德に見えるものだと氣付いたくらゐである。かくて萬事は思ふ壺に入つた。誰も氣が付かなかつたらうが、手に痕をつけないやうに、あの拳で破碎した盃には、始めから、手巾を被せて置いた。

此狂言は一體が頗る俗で下品といつても宜い

が、そこは豫て期した所、これより少しでも微妙な狂言を行ると解りつこが無い。先づ頻に腕を振つて、所謂「興奮」の状態で、パエルに話しかけ終に彼奴も驚いてあの小さな眼を剥出した比に、今度は非常な憂鬱に陥つて見せると、何時も親切なイレエヌ・パヴロヴナはとうとう尋ねた。

— 貴方どうなすつて。何故そんなに恐い御顔をなさるの。

そこで一座の視線が身に集つた時、物凄い笑顔を作つて見せる。

—どこか御悪いの。

—否、少し苦しい、眼がまはる。御心配には及びません。直に治ります。

此家の女主人は安心した。疑深いパエルだけは、いまだ不興氣に横眼で睨んでゐたが、少し後で彼奴め、天の漿といふ風に葡萄酒の盃を唇に當てようとする途端、こんと一折、盃は碎ける、皿は割れる、破片は飛ぶ。パエルはぶつぶついつて悶く、婦人連はきいきいふ。自分は切齒して卓布を引張つて、上の物を顛倒かへした。實に立派な大芝居さ。

自分を取巻かれた腕を押へられた。水を持つて來るのもある、自分を無理に腰掛させるものもある。此方は唯眼をくりくりさせて、動物園の虎のやうに呻つた。からきし馬鹿げた事ばかりで、周囲の氣が利かなさと言つたら、丸で御話にならない。餘の事に今度は本氣になつて、自分の位置が與へる特權を利用して、しやつ面の二三は打してやりたくなつたが、勿論じつと怵へたのである。

次は徐ろに正氣に復へる順取なので、胸は劇しく波打つ、體はぐつたりする、齒軌はする。微かな力

の無い聲で御定の文句、

— おや、何處だ。どうしたのだらう。

『おや何處』だなどいふ馬鹿馬鹿しい定文句でも、一座に手應があつたから可笑しい。すると傍の野呂間どもが直に教へて呉れた。

— 確りし給へ。カルガノフの家だよ。(優しい聲で) 先生イレヌ・バヴロヴナ・カルガノフが御解りですか。

實に彼等には過ぎた大芝居であつた。

翌々日— サギエロフの家へ世間の噂が傳はる

のを計つて— タチヤナとアレクシスとに會つたが、就中あの男には此事件がてんで解らないと見えて、自分に尋ねるには、

— 一體君、カルガノフの處で何をしたのかい。と言ひなから背を向けて、書齋の方へ行つて了つた。自分が眞に狂氣になつても、あの男はさまで驚かないのだらう。之に反して夫人の同情は如何にも喋々しく騒がしくつて、明らかに心から出て居ない。そこで、自分此行掛けた事を少しも悔いないが、唯こんな面倒な事をする仕業があるたら

うかと心に問つたのである。

—もし、あなた、そんなに旦那様が好いのですかと、夫を見送るタチヤナに尋いて見ると、ちらりと一目此方を見て、

—はい、それはまた何故。

—うん、何故つて事も無い。唯御聞申したので、と暫時睨合つた。口には出さない考が心中にとつおひつした後、

—何故貴方は私を御信用にならぬ。

女は更に此方の眼をじつと見詰つめたなり、返

事もしない。此時は先に自分の笑はれた事も忘れて、何の悪意も感じなかつた。無駄な不思議の行をしたものだと思ふばかり、これは前日來の劇しい神經の興奮に續いて起つた反動である。而も此反動は眸く間に消えた。

—一體貴方は信じられる方ですか、と久しく無言の後にタチヤナは答へた。

—無論さうではありません、と笑ひながら自分も答へたものゝ、此時將に消えんとした焔はばつと心中に燃上つて、何物も禁じえぬ勢力と勇氣と

決心とはむらむらと胸を衝いて生じ既に獲得した成功を頼として大膽にも更に前進しようとした。めた。嗚呼争鬪、これが人生唯一の悦である。

第二回の發作は第一回のより後れること約一月、今度は先ほど研究を積まなかつた。既に一般計畫は熟してゐるので、あまり考がへるのも餘計と思つたからである。其晩實行する積で無つたが、事情が丁度持つて來いで、之に乗じないのも愚のやうに見えたからである。其時の事はよく記憶してゐる。皆が客間に座してゐて、談笑酣の比、急に自分

は鬱いて來た。いつに無く身の孤獨を感じて、此腦中に閉ざれてゐる自分は宛も牢にある如くて、全く他人と隔離されてゐると思ふや否や、周圍の人々が耐へ難い程厭になつて、忽ちくわつと興奮した。暴言を吐散しつゝ、拳を振廻すと大勢の蒼ざめた顔の上に恐怖の色の浮ぶのを見て、心密に大喜悦を覺えた。

——畜生奴、こん畜生め、嘘付め、偽善者め、此腹黒め、貴様達は、大嫌だ、と怒號つた、また實際にも彼奴等を擲飛して、それから召使

や御者までも打つた。然し今他を打つてゐるのだなとは充分自覺してゐた。故意とだとも自覺してゐた。何が無しに唯擲るが愉快面と向つて本當の事を言つてやるのが嬉しい。諸君、本當の事を言ふものは皆狂人かね。鑑定人諸君、實際自分は萬事を自覺して居た。他を打擲してゐる時、此拳が生きてゐる肉に當つて、之を痛めてゐるのだと自覺してゐた。さて宅へ歸つて、獨になつた時、實に自分も名優だなあと思ひながら、そこで床に就いて、一冊の書を読んだ。著者の名を言つても宜い、ギイ・ド・モオ

パッサンである。平常のやうに大層面白かつたが、其後は小兒のやうに熟睡して了つた。一體狂人が書を讀みますか。諸君、どうです。又讀書をしても面白いでせうか。小兒のやうに熟睡するものだらうか。狂人は眠らない。苦むばかりである。腦中の萬事は擾亂されて、むしやくしやして、終に滅びるのである。咆えたくなる、手を引搔きたくなる、四つん這になつて、そうつと、そうつと這たくなるかと思へば急に起上つて。

—わあ。

笑ふ、咆える、怒號る、かういふ風に頭を擧げて、長い長い悲しい悲しい遠吠をするのだ。

さうとも、さうとも。

自分は小兒のやうに熟睡した。狂人は小兒のやうに熟睡するものだらうか。

第四號

昨夕看護婦のマアシアが尋いた。

—アントン・イグナチエヰチ、貴方は御祈をする事が無いのですか。

眞面目な語氣である。此方も亦同じやうに誠實に答へると信じてゐるのだらう。自分は莞爾ともせず、答へてやつた。

—いゝえ、マアシア、決してしない。然しそんなにしたければ、此頭の上で十字を切つても宜いよ。

マアシアは尤らしく三度迄十字を切つて呉れた。

此ひとの良い女を一分たりとも悦ばしてやつたの自分を頗る満足に感じた。諸君は身分のある、自由の人で、召使の者などに注意する事はあるまいが、吾々四人又は所謂狂人は彼等に接近するやうになつてゐるから直に驚く可き発見をする。諸君はまた狂人の看護に付けてあるあのマアシア自身は狂人であるとは夢にも知るまい、而もそれは事實である。

あの音のしない、滑るやうな、少し臆した規則正しい、巧な歩行振を見給へ。丁度眼に見えぬ拔身の

中を縫つて行くやうではないか。あの顔をよく見給へ。尤も先方に勘付れないやうにして見給へ。諸君の一人が此室へ入つて来る時、マアシアの顔付の落着いて勿體振つて来て、態と叮嚀にする處が、まるで諸君自身の表情その儘だ。實にマアシアは不思議な而も意味の有る能を持つてゐると言はねばならぬ。即ち其面に他人の表情を吾知らず反映する力である。時々此方を見て莞爾する事もあるが、其莞爾はあの女ので無い、他から来た薄色の莞爾だ。マアシアが此方を見詰める時、自分は今微笑した

なと察しられる。又折ふしはマアシヤの顔が物凄くも殉教者の色を帯びて、眉は鼻の付根に集り、口の角は下り、顔全體が確に十年は老けて曇つて來ると、それは多分此方の面相が同じ様子を呈してゐるのである。諸君も知る如く、深く冥想到に沈んだ人の眼付は妙に恐しいものだが、マアシヤも眼をくわつと開いて瞳は色濃くなり、双の腕は靜かに上がつて默然として近づいて來ると、親しげに此方へ手を掛けて、髮の毛や、部屋着の亂れたのを直して呉れる。

一寸帯が解けて居ますよ、といふが、顔は相變らず、恐しい。

然し唯一度獨で居る所を見た。あれが獨で居る時は不思議にも顔がまるで表情を缺いてゐる。死人のやうに蒼白く、美しく異體が知れない、そこでおい、マアシヤと呼ぶと、急に振回つて常の遠慮した微笑を浮べて。

何か持つて來ませうか、とぬかす。始終何か持つて來たり、持つて行く女である。何も持つて來たり、行つたり、直したりする物の無い

時は如何も苦しうで、其間はいつも無言だ。物に衝突つたり、物を落したりする事は一遍も見た事が無い。世の中の事を話掛けて見たが、何を言ても、恐しく冷淡で、教育の無い連中の心をあれほど感動させる人殺や火付や、其他の惨事を話しても無頓着である。

— 解つたかね。それ傷を負はず、殺す赤兒は飢に迫ると曾て戦争の話をした。

— え、解りましたと言ふが、又眞面目な調子で、あの乳を上げる時間ではありませんか。今日

はあまり食事が進みませんでしたね。

自分は笑つた。向も少し遠慮して笑つた。あの女は一度も芝居を観た事が無い。露西亞が一の國家で他にも多くの國家がある事を知らぬ。讀み書きは全くいけず、御寺で聞いた處のほかは、福音書の文句も知らぬ。毎夕跪いて、長い間祈禱をしてゐる。始のうちには智慧の足りないで、一生奉公人で暮す愚物かと思つてゐたが、不圖或事件の爲に、自分は此説を更へる事となつた。

勿論、諸君は知つてゐる、自分が此處へ來て、一寸

容態の悪い事があつた。それは何の證據にはならぬ。身體の疲勞と衰弱とを示すのみだ。あれは手拭だつた。確にマアシアよりは自分強いかから、絞殺するぐらゐは何でも無い。此時室内には二人しか居なかつた。若しあの時、聲を立てたり、腕を抑へたりしたなら……然しマアシアは落着いたもので、簡単に言放つた。

— 貴方、そんな事をしてはなりません。

其後、此「なりません」を度々考へて見たが、今だに解らないのは此語の中に在つて、頗る自分を動かす

不思議の力である。語に力が在る筈は無い。語其物は空虚だ、無意味だ。抑もこの力はマアシアの魂の奥底、自分の知らず、又達し得ぬ奥底に潜んでゐる。さうだ、あの女は何か知つてゐる。唯之を言顯せない、又言顯さないのだ。ずつと後になつて、此「なりません」の説明を度々迫つて見たが、どうも満足に答へぬ、要領を得ない。

— お前は自殺を罪と思ふかね、神様が御禁めなさるか。

— いゝえ。

—では何故自殺していけない。

—それは何です。してはなりませんのです、と微笑しながら、—何ぞ持つて来ませうか。

確かにこれは狂人だ。したが穏やかな性の狂人で、多くの狂人のやうに、何か用を足して役に立つ、驚かすには當らない。

少し横道の話を見せて戴かうか。昨日のマアシアの間で、ふと幼年の時を思い出した。自分は母の顔を覚えてゐないが、宅にはアンフィズといつた叔母が居て、每晚此頭の上で十字を切つて呉れた。顔中

腫物の痕がある無口の此老嬢は父がよく其前で婿の話をして挪揄ふ時、むつとするのが癖であつたが、自分のまた小さい時分、確かやつと十一二の頃、宅の炭部屋の裏で首縊をして果てた。父はよく其夢を見るといふので、あの陽氣な神いちりの嫌な人も篤く供養を營んだり、彌撒を上げたりして、冥福を祈つた。

父は仲々伶俐で才幹があつた。其法庭の辯論は感へ易い。婦女子のみならず、沈着いた眞面目の人をも泣かした。だが、よく其平生を知つて居て、又ぞ

る腹にも無い事を言ふと知つてゐる自分だけでは
どうも泣けなかつた。父は智識や思想や、殊に言語
に富んでゐて、其言語、其思想、其智識を巧に組合せ
るのである。而も終に何の意味も無い。それで自分
は屢々父の存在を疑つた。といふのは、父は全く表
面だけの人で、聲である、身振である。どうしても人
間とは受取れない。蓄音機を仕掛けた活動寫眞の
現像かと思はれる。本當に生きてゐて、今に死ぬ人
間らしい所を薩張見せて呉れぬ。父は人生に何物
をも覺めなかつた。床に入つて動かなくなつて眠

に就く時は、大方何の夢も見ないで、唯生活の流が
一時止るばかりだ。彼は一枚の舌を以て——辯護士
を職として居た——一年一萬三千留の収入を得た
が、唯の一邊も此事實を不思議とも何とも思はな
かつた。或日新に購求した地所の見物に、二人で行
つた時、自分は廣庭の立木を指して、

——これは皆依頼人からですか。
父は莞爾して得意顔に

——うん、さうだ。才といふ物は、大したものだなあ。
随分酒のいける方で、其酔振が少し變つてゐる。

運動が總體に速くなつて來て、また急に停る。——それは寢込んで了ふのだ。世人は彼を才能ある非凡人と仰ぎ、父も亦常に、もし有名な辯護士でなければ、美術か文學の大家になつたらうと言ひ言ひしたが、成程不幸にも當つてゐる。

父は人間の中で、現在の子の自分を一番理解しなかつた。或時既の事で財産全部を無くなさうとした事があつた。自分に取つては實に大事件であつた。富のみが獨人間に自由を與へるこの當世に、若し運命が自分を無産者の群に投入れたなら、其

結果は果してどうだつたらう。自分でもよくは解らぬ。今に其時の事を思出すと怒氣心頭を衝いて起る。他が此體の上に手を掛けて、爲たくも無い事を強ひてさせ、わが勞作、わが心血、わが神經、わが生命を僅數錢に買ひ得たらうと思ふと、憤らずには居られない。然し此恐怖はほんの瞬間しか續かなかつた。自分のやうな人間は決して貧窮に終るもので無いと感じたからである。所が父は心から自分を馬鹿な青二才と思つて、所謂自分の無氣力に憫れた。

—アントン、アントン、お前これからどうする積だ、といふ親父の方が全く氣力を失つてゐて、髪の毛は長く亂れて額に垂れ、顔色鉛のやうになつてゐた。

—私の事なら御心配に及びません。どうせ才の無い私ですから、ロオトシルドを殺すか、銀行破をするかの二つです。

父は怒つた。時もありうに輕佻な冗談をいふと思つたからである。此方の面を見てゐながら、聲をも聞いてながら、それで冗談を言ふと思ふ御目出

度さ、厚紙で作らへた下劣な傀儡のやうな親父も、此誤解をやつたばかりに、始めて此時だけは人間らしく見えた。

父はてんで此方の精神を知らなかつた。息子の生活の外見も氣に入らぬ、其意味が解せぬ。息子が中學で、良い席順を占めるのが、第一、氣に食はぬ。辯護士や、文學家、美術家などの來客がある毎に、自分を指して、

—あれが忤です。—學校で一番ですよ。—嗚呼、何で私は神様の怒に觸れたらう。

人は此方を見て笑ふ、此方は人を心中に蔑視した。それで此良成蹟よりも更に劇げしく父を怒らせたのは、自分の行動と習慣とであつた。よく父は室へやつて来て、態と本を顛倒かへしたり、其處いらを散した。息子の髮の荊方を見たばかりで、食欲が減るさうだ。

其時自分は莊重の語氣を以て——視學官から髮を短くするやうにとの命令です。

父は甚い悪口を吐いた。自分は心中密に侮蔑の笑を禁じえなかつた。

父が一番氣を悪くしたのは、學校用の手帳を見る時である。時々酔拂ふと、可笑しいほど自暴自棄の容子で、手帳を吟味した。

—おい、貴様、手帳を汚した事が無いか、一度ぐらゐは。

—え、ありました。一昨日三角術の手帳を汚しました。

—嘗めたか。

—嘗めるつて何です。

—おい、書損を嘗めたかと言ふんだ。

— いゝえ 吸取紙で拭取りました。
 醉拂の身振で、父は手を動し、腰を伸しながら、口
 の内で—己の子では無い、己の子では無い。
 所が親父の大嫌の此手帳の中には却つて大に
 悦ばせる事が書いてある。これにも消の線や、字消
 の跡は無い。まづ言つて見れば、こんな事が書いて
 ある。

— 親父の泥酔漢、泥棒、腰拔とあつて、次には一々
 明細に其説明を加へて置いたが、こゝには略す、父
 の名譽のみならず、法律を尊敬して。

不圖心に浮んだ事がある。今迄うつかりして居
 たが、鑑定人諸君の興味を惹くものと察する故、今
 之を思出したのを深く満足に思ふ。どうして今迄
 忘れて居たのだらう。
 宅の小間使にカチヤといふ女が居た。これは親
 父の妾で、同時に自分のもあつた。女は親父から
 金を貰ふので、親父を愛し、自分は若くて、眼が黒く、
 金を遣らないから、自分を愛して呉れた。さて父の
 亡骸を棺に収めた其晩、自分はカチヤの室へ行つ
 た。其室は客間に近く、通夜僧の讀經の聲が手に取

るやうに聞える。

父の不滅の靈魂は十分に於て完全な満足を得たことであらうと自分は信じる。

いや、實に面白い事實だ。それを今迄黙つて居たのは、自分ながら譯が解らぬ。諸君、諸君は之を馬鹿げた悪戯と思ふだらうが、大間違である。諸君、此時の奮闘は實に慘憺たるものであつた。勝利は實に容易で無つた。自分は眞に生命を賭したのである。此時若し恐怖の念に襲れて、一步でも退却したら、即ちカチヤを常のやうにする事が出来なかつた。

ら、自分は直に自殺したらう。いや、既に決心は付いてゐた。

其夜の自分の行は自分位の年頃の青年に取つて容易で無い。今ならほんの所謂風車と戦ふのだと覺つて了ふだらうが、其時は全く他の見地から、此事件を観察してゐた。其時の感をすつかり記憶に浮べる事は難しいが、何でもこれだけは覺えてゐる。自分は此一舉を以て神と人間とのあらゆる法則を破らうとしたのだ。少し可笑しほと恐く而も其恐さを制し得る一種の感に打れたが、さて愈

カナヤの室に入つて見ると、まるでロメオのやうに接吻を求めたのである。

左様まだ其頃は自分も仲々空想派であつた。嗚呼幸福の青春期今は遠い昔である。諸君、自分は終にカナヤの室を辭した時、父の屍體の前に停つて、拿破崙のやうに腕組をして、可笑いほど得意になつて父を眺めたが、ふと經帷子のがさついたので、ぞつと身顛がした。

幸福の青春よ、懐かしくも遙なる昔ではある。うも今に自分は空想の氣が抜けない。自分は殆一

種の理想派であつた。自分は人間の心と其涯無い勢力とを信じる。人類の歴史全部は凱歌を奏する人心の進行である。つひ昨日迄は思つて居た。それなのに、わが一生は終始一貫した大錯誤であつて、自分は隣室の氣が違つてゐる役者と同然に是迄狂人であつたと考へるのは、如何も苦しい。隣の先生は頻と青や赤の紙片を方々から集めて、其一二を百萬圓といつてる。見舞人に強請つたり、又盗んで來たり、手洗場から持つて來たりするのを看護人達が揶揄ふ。大將はまた心から皆を輕蔑して

居る。自分だけは御氣に召したと見えて、先日別際に百萬圓呉れた。

—これはほんの壹百萬圓ですが、どうぞ御納め下さい。實際私も色々入費が嵩みまして……

自分を傍へ連れて行つて聲を潜めて言ふには、

—今伊太利亞から報告に接しました。實は法王を逐出して、新貨幣を設けようといふのです。それ、これをな。—それから或日曜日を下して、私が聖人だと名告るのです。伊太利亞人はさぞ満足しませう。新らしい聖人を甚く喜ぶ手合です。からな。

待て、もしや自分も亦數百萬圓と一緒に暮してゐたのでは無いか。

思へば實に不思議である。自分の同伴親友とも謂つ可き諸の書籍は、あの書棚の上に列んでゐて、宇宙の智慧、希望、幸福を藏してゐながら、沈黙してゐるのである。諸君、狂人にしろ、何にしろ、諸君の見地から、自分は一種の怪物を以て目されてゐると信じる。さあ其怪物が書齋へ入る所を見給へ。

鑑定家諸君、あの室を見給へ、面白い事がありま

すぞ。筆寫をする机の左の上の抽斗に藏書繪畫骨

董品の明細目録がある。又筆司の鍵もある。諸君も
 學者だ、其等の藏品を相當の注意と尊敬とを以て
 取扱つて呉れるだらう。又ランプがいぶらないや
 うに願いたい。あの細い油煙ほど世に恐しいもの
 は無い。どこへでも入つて来る。拭取るのが大變だ。
 看護人ペトロフは此方が請求した分量の睡眠
 劑を呉れなかつた。とにかく自分には醫者だ。自分の
 爲る事は自分で知つてる。何事にも依らず、自分の
 言ふ事を聞かないと、終に斷然たる手段に及ぶ積
 である。此二晩といふものは、まんじりともせぬ。自

分は決して狂氣になりたくない。自分は是非睡眠
 劑を請求する人間を狂氣にするのは不都合だ。
 紙。こ。ゝ。に。盡。く。

第二回の發病後、世間は自分を恐がりだした方々の家では自分を寄付けないやうにした。ふと往來で人に會ふと、向は顔を蹙める。臆病にも態と莞爾して、何か意味ありげに、

—あゝ、時に御機嫌は如何です。

占めたぞ。周圍の人の尊敬を失はずに、これからどんな罪でも犯せるのだな。他の顔をじろじろ見て考へた。殺さうと思へば、彼にしても宜し、此にいても宜し、それで罰は受けない。かうなると一種の

新らしい快感が起つて來て實は少し恐いくらゐだ、一體人間といふものは觸つてならぬやうに嚴重に保護されてゐるものだが、それが今は全く一變して、之を守護する介殼も脱れ赤裸になつた、そんな者の一人や二人殺すのは何でも無い一つ行つて見ようかなどといふ氣も出た。

自分を見抜かうとする幾多の眼は、厚い壁のやうな恐怖の爲に遮られた。従つて自然と第三回の伴狂氣の必要も無なつた。當初の計畫中、此點だけは變更したのである。然しそこに才能の力がある

のだ。才能は豫め框を設けない、形勢に應じて作戦
計畫を全く變へることもある。唯自分は過去の罪
を公然免除され未來の罪をも認許されたいと思
ふので、即ちわが病氣の醫學上學術上の證明を得
たいのである。

これにも亦事情の湊合するのを待つてゐた。例
へば精神病の専門家に診察して貰ふのが如何も
偶然に出た如く又は已むを得ずしたやうに見せ
かけた。或はこれは無用の策略かも知れない。然し
持役を十二分に演つてのけるには、これ亦技藝上

から價值のある事だ。自分を専門醫の許へ送つた
のは、タチヤナと其夫との勸告であつた。

—どうかお願ですから、専門家に診て御貰ひな
さいまし、ねえ、貴方とタチヤナはいふ。

「ねえ、貴方とはこれが始めてだ。こんな少しばが
りの優しい語を貰ふにも、狂人に迄ならねばなら
ないのか。」

—はい、畏りました。行つて診て貰ひませう、と答
へた。其時は三人の一座であつた。アレクシスも居
たのである。而も後に人殺をしなければならぬあ

の書齋に。

— さう、さう、君屹度行つて來給へ、とアレクシスは明瞭言つた。— そでない、と一體何を爲るか知れない。

— 然し何をするものかね、と實は此やかましい友人の眼を避けて、怯々答へた。

— なに、人の頭ぐらゐは割るかも知れない。

自分は此時重い銅の卦算を掌の上で轉がし居た。アレクシスと此卦算とを等分に見ながら尋いた。

— なに、頭を、頭をかね。

— さうさ、頭さ、そんな物で直やつつけられる。

これは段々面白くなつて來たぞ。實は丁度今此卦算で自分が割つてやらうと思つてゐる其頭が事の成行を考へてゐるのだ。吞氣にも微笑しながらそれを考へて居る。それを世には死ぬ前に虫が知らせるなんて信じて居る者がある。馬鹿な。

— こんな物で人が殺せようか、あまり輕過る。

— 何、何、輕過るつて、と急込んでアレクシスは卦算を奪つて、あの纖い指で、振回はしながら言つた。

— やつて見給へ。

— いや、かう持つのだ。それ。

自分が厭々らしく笑ひながら、此重い卦算を取つた其途端、タチヤナは中へ入つた。眞青になつて唇は震へてゐる、聲は寧ろ叫であつた。

— アレクシス、お廢しなさい、アレクシス。

— どうした、タニヤ、どうおしだ、とアレクシスは驚く。

— お廢しなさいてえば、そんな冗談は私嫌ひ。

三人揃つて吹出した。卦算は机の上に置かれた。

博士の家では萬事此方の思ひ通りになつた。博士は用心に用心を重ね、極謹んだ語を用ゐるが大層重く診たらしい。よく世話をして呉れる親類があるかなどと尋ねて、兎も角、外出を廢めて安靜にしてゐるやうにと勧めた。自分はそこで醫師の資格を以て、少し博士と意見を闘はして見た所、此反對を試みたので、其時迄少しは疑があつたとして直にそれは消滅して、此時から、どうあつても自分には狂人であると診断して了つたに相違無い。鑑定人諸君、諸君の同僚に對して、こんな無害の狂言

を行つたのを氣に掛けては困る。T博士は學者として、勿論最大の尊敬を受く可き人物である。此時よりわが一生の最も幸福な日が始まつた。人は自分を病人取扱にして、訪問も爲て呉れるし、一種の妙な片言を使つて話をする。自分だけは他の人と同じく健全であるのを知つてゐて、己が心の産出した、有力で精密である作品を眺めて悦んでゐた。人生の驚奇すべき想像外の萬事のうち、人間の心ほど不思議のものは無い。これには神の如き分子がある、これが其不滅の證左である。實に涯

限の無い大勢力である。人は高山の雪の頂を眺めて驚歎の感に打たれるが、若し眼を轉じて、己自身を解したら、世界のあらゆる高山、あらゆる美、あらゆる寶よりも、自己の心を觀て驚歎することである。一片の煉瓦に次の煉瓦を重ねる時、それが最上の法だらうと考へる職人の單純な精神状態——それが一大奇蹟である、最大不可思議である。自分にはわれとわが心を玩んだ美にして且淨いわが心は、戀人のやうに熱情を傾けて、われに身を任せ、奴僕に如くわれに仕へ、友人に如くわれを援

百八
けた。諸君、さりとして自分は始終四の壁の内に居て、
あの計畫ばかりを考へて居たのでは決して無い。
否、あの計畫は夙うに熟して、研究は盡されてゐた。
自分は他に種々の事を考へたのである。自分及び
自分の心、此二人は宛がら生と死とを賭物に勝負
をした。而も二人は死生の上に超越してゐた。様々
の仕事をした内、一つ久しく解決に苦んだ難問で
ある。或非常に面白い象棋の手をとうとう考出し
たのである。諸君も知らるゝ如く三年前に萬國象
棋大會に出て自分は二等賞を取つた。一等賞はラ

スカルに落ちたのである。若し自分が名聞がまし
い事が嫌ひでなかつたなら、自然あゝいふ會へも
續いて出席したらうし、さうすると、ラスカルも、既
に長過るほど保つて居る地位を、自分に譲らざる
を得無くなつたであらう。

さて、アレクシスの命が自分の掌中に歸した以
來、面と向ふと或特別の氣持がした。あの男の生き
て居て、飲んだり、食つたりするを見て、これも皆此
方がさうさせてやつてゐるのだと考へると、どう
も愉快で堪らない。宛で親が子に對する心持だ。然

しあの男の健康に就いては少からず心配したもので、彼奴は脆弱の癖に、とんでも無い不養生をしたり、ふらねるを嫌つたり、湿々した時も防水布をはおらなかつたりしたが、幸、タチャナが態々宅へ訪ねて呉れて、此頃はアレクシスも大層丈夫で、珍らしくよく眠ると言つて来た。自分は甚く悦んで、ふと其比手に入つた一冊の珍本をタチャナに託して、夫へ進物とした。此本はアレクシスが永い間欲しがつてゐたのである。或は此進物はわが計畫の立場から見ても失策かも知れぬ。何か自分の罪跡

を晦さうとしたやうに見えるが、實に唯アクションを喜ばせたいばかりで、思切つて此危険を冒したのである。

此日はタチャナに對しても、大分愛想よく、さつぱりしてゐたから、先方によく思はれたやうだ。タチャナはアレクシスと同じく、自分の發作の處を見たことが無いので、自分を狂人とは想象しにくい、いや、想象も出来ないのである。

— 宅へ一寸、御遊にいらつしやいな、と別際にタチャナは言つた。

百十二
—行かれませんか、と笑つて答へた。—醫者に禁められてゐます。

—馬鹿な是非いらつしやい。お家にゐるのも同じ事です。アレクシスも暫らく御目にかゝらないので、退屈して居りますから。

—では、上りませう、と約束した。此時ほど是非約を果さうと決心した事は無い。鑑定人諸君、此不思議な暗合を知つた以上は、アレクシスを殺したの自分ばかりでは無い、他の或物だと御氣が付かれません。而も實は他に何物も無い。そら、實に單

純で論理的の事ではありませんか。

十二月十一日、午後五時、アレクシスの書齋に入つた。時卦算は例の處に置いてあつた。食事には間がある—それは七時である—それ迄夫婦は休息してゐるのだが、自分の訪問を大層喜んで呉れた。—あの珍本はどうも難有と握手をしながら、アレクシスは言ふ。—僕も上らうと思つたが、マナヤナは君が全快だと言ふ。けふ一つ芝居へ行かう、君來給へ。

それから話が始る。此晩は決して伴を言ふまい

と決心した。この伴の全く無い處が、即ち又微妙な伴であつた。精神の興奮してゐる爲、自分は種々喋舌り散したが、條理整然としてゐた。サギエロフの崇拜者よ、若し『彼』の名論卓説は、大部分其友人ドクトル・ケルジエンツエフの腦中に生れたのだと知つたなら……

此時自分は精確に詳細に一句一句切つて話をして、同時に時計の針を見詰めて居た。其針がIAの數字の上に来る時、人殺にならうと考へた。山々の話に滑稽も雜つて、三人共にわつと笑つてゐる中

にも、心の内で、自分はまた殺人者で無い、今にならうとして居る人間の心持はどんなものだ、一つ之を記憶して置かうと考へた。アレクシスの生命の進行、心臓の鼓動、頭蓋骨内の血液の循環、腦髓の無聲の顫動等は、抽象の心象では無く、極めて單絶な直覺に依つて知り得たのである。さて心臓が血液を送達しなくなり、腦髓も顫動しなくなつた其時、此生命の進行がふと斷絶した其時は、どんな風だらうと想象して見た。
而して此等の考は誰の心の上に集つてゐるの

だ。

透明なわが心の斯くも深く、斯くも高いことはこれ迄無かつた。わが『我』の斯くも複雑にまた調和して働いた事は今迄覺が無い。自分は神のやうに、視ずして見、聴かずして聞き、思はずして知つた。

もう七分といふ時、アレクシスは長椅子から無造作に立上つて、欠伸をしながら向へ行つた。

——直に來ます。

タチヤナの眼に會ふのを避け、自分は窓に近づいて、幕を割つて、其處に立停つた。後で見えないが、

タチヤナも足速に室を横つて、自分の傍へ來たその呼吸が聞える。此方を見てゐるのだ。窓を見てゐるのでは無いと氣が付いた。自分は黙つて居た。

——雪が煌々しますこと、とタチヤナは言ふ。それでも自分は黙つてゐた。

——アントン・イグナチエギチ、と言つて暫らく途切れた。

自分はまだ黙つて居た。

——アントン・イグナチエギチ、と依違ひがなら呼びかける。自分は急に振向く、女は蹠跟けた、倒れさ

うになつた。自分の眼から出た恐ろしい力に推倒されたやうである。此時室に入つて來た夫の傍へ凭れつゝ、口の内で、

—アレクシス—アレクシス—あの……

—どうした。

莞爾ともせず、而も聲の變化で語を和げながら、自分は言つた。

—これで君を殺すのだらうと、奥様は思つていらつしやる。

そこで自分は極めて落着拂つて、公然とあの卦

算を取つて、靜にアレクシスの方へ寄つて行つた。

あの蒼白い眼でアレクシスは見返した。

—なに、思つてゐる……

—え、思つてゐられる。

物靜に寛つたりした手付で、自分は腕を上げた。

アレクシスも靜に腕を上げながら、眼を放さない。

待てと嚴かに自分は叫んだ。

アレクシスの腕は止つた。眼は始終此方を放れ

ぬ。蒼白い寂びしい輕蔑の微笑は唇の上に浮んだ。

タチヤチは何か恐ろしい聲を立てた。—然し手後で

ある。卦算の尖つた一端を以て、うんとばかりに額の上、眼よりも眉の弓形に近いあたりを一打倒れた處に、伸しかつて、なほも二打くらはせた。豫審判事は頭の滅茶苦茶になつてゐるのを見て、幾回も打撲したやうに言ふが、それは嘘だ。皆で三度打つたのである。立つてゐた時、一度倒れてから二度だ。成程打撲は強かつた。然し三度だけである。確に覺えてゐるさうさう三度だ。

第六號

第四號書類末段の文字は強ひて讀解かれずと宜い、又一般に消の多いのをあまり重く見られるな。これを狂氣の徴候とせられては困る。今自分は一種變な地位に立つてゐるのだから、萬事に注意して置かねばならぬ。これは諸君の熟知する所だ。夜の暗は疲れた神經組織に強く働くもので、其爲に恐しい考が起る。犯罪後の一夜はどうしても、神經が特別に亢ぶつてゐた。如何に之を制しようとしても兎に角一人一人を殺すといふ事は笑談で

は無い。茶の時刻になつて顔を直し、爪を磨き、着物も改めた後、マリヤ・ヴシリエヴナを相手に呼んだ。これは身の邊の世話をさせる女で、まあ妻のやうなものだ。他に情夫があるやうだが、静な良い女だし、且つあまり打込んでも居無いやうだから、そんな小不便はまづあきらめて往生してゐる。どうせ金で買ふ愛には避け難い事だ。所が此女が第一の打撃を自分に與へた。

—こゝへ御出で。
妙に笑つてゐるが、やつて來ない。

女は震へた、赤くなつた、眼に恐怖の色が浮んだ。卓子の向から及腰にして懇願するやうに、

—アントン・イグナチエヰチ、ねえ、貴方御醫者へいらつしやいよ。
自分はむつとして叫んだ、—何だと。

—後生ですから、そんな聲を出さずに、恐いわ、ねえ、貴方おゝ恐い。

マリヤは自分に發作のあつた事も、まして人殺をした事も全く知らない。自分は不斷此女に對しては平らで、可愛がる風を示して居るのだが、さて

は自分には他の人と異つた、何處か恐い所があるのだな」といふ考がふと浮んでまた消えた。しかも手足や背には何となく冷やりした感覚が残つた。屹度マリヤは町の人か宅の召使からでも自分の病氣の事を聞いたのだらう。或は今脱棄した衣服の裂けたのを見たのだらう。恐がるのも自然だと心に思つた。

——もう、いゝ、あつちへ、と自分は命じた。

そこで書齋の長椅子の上に横になつた。書を読む氣がしない。何だか全身の疲労を覺えて、つまり

見事に大役を演つてのけた俳優のやうだ。然し自分の藏書を眺めてまたこれも後に讀めるなと思ふのは愉快で、此室も此長椅子も、マリヤ・ヴシリエ・ヴナも皆氣に入つてる。頭の中にはあの持役の臺詞の斷片が浮び、眼前にあの時の運動が現はれる。折には又あすこの處はかうした方が、かう行つた方が佳かつたなど、いふ批評も徐々出て來るが、只、當意即妙あの「待て」には甚く満足してゐる。實驗しない人には殆信ぜられぬほど珍らしい暗示の力の好適例であつた。

眼を閉ちて微笑して、自分は繰返した。待て眼蓋が重くなつた。眠くなつたと思ふ途端に新しい一の考がふいと腦の中へ入つて來た。是迄の他の考のやうに、ぶらぶらと靜かにやつて來る明晰精覈單純の性を具へてゐるから、どうしても、これは自分の考らしい。此考が靜々頭に入つて來て、そこに止つた。何故だか三人稱で浮んだのであるから其儘書顯はすとかうである。

ドクトル・ケルジンは眞の狂人らしい。自分で狂人の眞似をしてゐるつもりだが、實際もう

狂人である。今が今も狂人である。

此考は三四回同じ言を繰返した。自分は何とも解らずに始終にやにやしてゐた。

自分では狂人の眞似をしてゐるつもりだが、實際狂人である。今現に狂人である。

終に此考の意味が解つた時、始はマリヤが言つてのかと思つた。何だが聲が聞えるやうで、それが女の聲のやうに思はれたからである。それから又アレクシスのあの死んだアレクシスのかとも思つたが、とうとうこれは自分だ。なと氣が付いた。

其時、嗚呼、恐い、恐い、自分は髪を筆つて譯も無く室の中央に立止つて思はず知らず、

—さうだ、さうだ、もう徒目だ、とうとうなつたか。あの境目に寄過ぎたか、これから先は狂人だ。

其筋の人が來た時、自分は恐しい風をしてゐたさうだ。着物は寸裂になり、顔色青ざめ、相好一變してゐたと見える嗚呼、あんな一夜を過して狂氣にならぬ、腦が何處にあらう。然しよく考へて見ると、別段變つた事をしたのでは無い。着物を裂いたり、硝子を破つたばかりだ。時に序ながら諸君に勸告

したい。若し諸君の内であの晩、自分の感じたやうな事に出會す人があるなら、其室内の鏡を包んで了ひ給へ。家に死人がある時のやうに、鏡はよく包んで置き給へ。

此話は書くも恐しく、思出すのも恐いが是非書いて置かねばならぬ。後へ延す事は出来ない。

其晩の事であつた。

酒に酔つた蛇、さうだ、酔拂の蛇が居ると思給へ、兇暴の性は依然として存してゐる。運動の敏捷は舊に倍してゐる。齒は一面に鋭く毒を含んでゐる。

それが酔ひ狂つて、蛇行歩く室の中には戦慄して
 人が一杯居る。冷刻に猛烈に蛇は人中を這廻つて
 手足に巻付いたり、顔に唇に噛付いたり又は蟠屈
 を巻いて、われとわが體に齒を立てる。而も蛇は一
 疋で無いやうだ。數千の毒蛇がぐるぐる巻付いて
 噛付き喰付く。これが自分の心である。自分のだら
 うと思ふ心の姿である。而してあの鋭い毒のある
 齒が自分の拯である。守である。
 一の心が數千の心に割れて其各は強く、又其各
 は互に敵だ。荒くれた圓舞が始る。樂の音は強烈に

響いて喇叭の如く、眼に見えぬ深い處から湧いて
 来る。それは逃げて行くわが心だ。一番恐い毒蛇だ。
 闇に姿を隠すからである。先には確り腦の中に封
 じて置いたが、今は脱出て、どこか身體の隅へ隠れ
 て、眼の達かない暗い深みへ逃げて行つて、他人の
 やうに喚いてる。宛も脱走した奴隸のやうに罰の
 來ないのに安心して、皮肉だ、横柄だ。

貴様は狂人の眞似をしてゐる。積だが、やい見ろ、
 眞の狂人だ。此ちつぼけなげちな野郎のドクトル。
 ケル。シン。ツ。プ。め。ケル。シン。ツ。プ。といふドクトルや。

い。狂氣のドクトル・ケルジエンツァーやい。

百三十二

かう言つて喚いてる。あの忌な聲は何處から來るのだ。一體何者だ。先は自分の心だと言つたが、さうで無いかも知れぬ。幾多にも割れたわが心は、火事場に舞ふ鳩のやうにぐるぐる飛廻つてゐる。それであの聲は、何處とも知らず、下から、上から、横から、見る事も出來ず、捉む事も出來ない處から叫んでゐる。

自分を苦めた感覺の中で、一番恐かつたのは、もう自分で自分が解らない、自分に認められる事が

出來ないといふ自覺であつた。凡てが一定の法則に従つて生活し行動してゐるあの巧に組織された腦の中に「我」が居た間は、自分で自分を認識し了解して、自己の性格や計畫に就いて思考する事も出來たし自ら信ずる如く眞に自己の主人であつたが、今は憐な憐む可き奴隸になつて了つた。數多くの室を具へた一棟の家があると想象してみ給へ。それで君は其一室に居て、全家屋を占領してゐると思ふ。豈料らんや、自分の周圍の他の室にも人が住んで居る。うん人が居る、妙なえたいの知れぬ

百三十三

人か物かゞ居て此家を持つてゐると急に気が付く。何物だらうと知りたいたいが戸は閉つてゐる壁一重の向には音もせぬ聲もせぬ、而も同時にこの黙然たる戸の彼方で君の運命が將に決せられむとしてゐるのだ。

姿見へ近づいた……嗚呼鏡を鏡を隠せ、隠せ。

其後の事はまるで知らぬ。法律と警察との代表者が来た迄の事は何にも覺が無い。そこで時間を尋いた。九時だといふ。宅へ歸つてから唯二時間、アレクシスの死んでから僅三時間にしかならない

とは、永い間どうしても信ぜられなかつた。

鑑定人諸君、殺人後の精神状態といふ此鑑定に必要な時の事を、かく漠然たる言語を以て陳述したのは自分の深く遺憾とする所である。然し實の所これだけしか覺が無い、人間の言語に移し得る所はこれだけである。例へば一刻の休息も無く自分を苦めたあの恐怖は、とても言表はすことが出来ぬ。のみならず先に語拙く言表はした事が凡て實際あつたか、どうか確と断言は出来ぬ。或は全くそんな事は無い他の事があつたのかも知れぬ。

唯よく記憶してゐるのはこの考否とにかく聲のやうなものだ、

ドクトル・ケルジンは狂人の真似をしてゐると思つた。然し實際狂人である。

今脈搏を數へてみた。一八〇。あの聲を思出すばかりでもこれほど氣が激む。

第七號

前回には無用な馬鹿馬鹿しい事を書いたが、不幸にして取消すことが出来ぬ。あれに據つて、自分の人格と能力との實相が誤解されはしまいかと心配してゐる。然し自分は諸君の學識と判斷力とが決して正鵠を失しまいと信じてゐる。

諸君も明察せらるゝ如く、餘程重大な原因があればこそ、このドクトル・ケルジンは親友サギエロフ殺害事件の真相を暴露するのである。其原因は直にまた容易に諸君に會得せられるだらう。

實は今日が今日迄、自分ながら怪んでゐるが、自分は罪を免れむが爲、狂氣の眞似をしたか、それとも狂氣であるが、人殺をしたのか、それが解らぬ。事に依つたら、これは到底解らないかも知れない。あの晩の悪夢は散じた。而も焼跡は残つてゐる。詰らぬ唯の恐怖では無く、凡てを無くなした人の恐怖、没落、癡癡、過失、不可測の秘密といふ冷たい自覺である。

博識の諸君は、此病症を論究せられるだらう。一方の論者は自分を狂人と断定し、他方の論者は精

神の健全を證明して、唯僅に二三變性の疑を認め、るぐらゐに過ぎないだらう。然し諸君の學術が何と言はうが、自分より更に明かに此狂氣か正氣かの問題を解決する事は到底出来ぬ。自分の心は恢復した。其强健と精密とはすぐ點頭れるだらう。此心は實に卓拔な心である。これだけは敵ながら認め、てやらねばならぬ。

自分は狂氣だ。一つ其理由を説いて御目にかけてようか。

第一に狂氣と断定を下すものは遺傳である。あ

の計畫を建てる時分、これは占めたと思つたあの遺傳である。小さい時にあつた癩癩の發作は……いや、これは失禮、先に之を隠して置いて、幼少の頃から健全であつたと言つた。尤も實の所あんな少しの發作で、それも直に消滅したのだから、之を危険な傾向と案じたのでは無い。唯あの時はそんな瑣細な事を數擧げて、徒らに話を長くするのを憚つたからである。然し今自分の議論を論理的に組立てるにつき、其土臺として、入用だから、何の躊躇も無く御覽の通に此遺傳を申立てる。

かういふ譯である遺傳及び上記の發作は精神病の素質がある事を立證する。自分の病氣はわれ知らぬ間に始つたので、あの人殺の計畫を建てるずつと前、既に起つてゐたのだが、凡て狂人の常として、吾知らず猾策に掛けたり、又は無意味の行爲を、尋常中正に見せる能力があるので、望の如く、他を欺したのみならず、自分で自分を欺したのである。どうです、諸君此議論には間然する所が無いでせう。

自分はタチヤナ・ニコライエ、ヴナを愛したので

は無いてんで犯罪の眞の動機は無いのを態々發明したと證明する事は容易である。此計畫の一種奇體な所を見ても、冷やかに落着いて之を實行したのを見ても、凡ての事情を綜合して考へると、こゝに一の狂氣じみた力を發見するに苦まぬ。自分の心の緻密な點や、殺人前の興奮は精神の異狀を示してゐる。

「われは舞臺の上に立ち、深手に撓み死にかゝる比武者の役を演じたり。」
一生の事實は一として其根柢まで研盡さない

ものは無いが、今また更に吟味爲直してみ、歩一歩と、あらゆる思想、あらゆる言語に狂氣の尺度を當て、見た所、語、每思想、每が、しつくりそれに當嵌るから堪らない。殊に驚く可きは、あの晩より以前にも、既に若しや狂氣ではあるまいかと考へた事である。然し其時は勉めてそんな考を脱しようとして忘れて了つたのである。

斯の如くわが狂氣を證明して、其結論はどうなる。即ち自分が狂氣でないといふ事だ。これが自分の新發見である。どうぞもう少し聞いて呉給へ。

自分は遺傳の犠牲だ、變性者だ。あの發作がかうと信じさせる。自分は多くの人と同じく、よく探せば、鑑定人諸君の内にも在るだらう如く、變性者だ。これが凡ての説明である。道德に關する自分の説は、冥想の結果では無く、寧ろ變性に依つて解釋が出来る。成程道德といふ本能は確と人心に錨を下してゐるから、これに離れると、少しはどうも尋常人の型から放れずに居られない。それで學術は、いつもの癖で、少し大膽過ぎる概括論を爲るもの故、すべて常軌を逸した者を、直に變性の部に引入

る、たとひヘラクレスのやうな體格で、滔々たる世の凡骨と同じやうに壯健の者でも、さう診斷して了ふ……然しそれならそれにして置け、變性でも何でも關はぬ。面白い連中の仲間入をするばかりだ。

殺人に導いた動機を茲に辯疏しまい。正直の所實にタチヤナ・ニコライエヴナはあの笑で眞に此方の感情を害した。此侮辱を蒙つた感は、自分のやうな心を表さぬ孤獨の人間には深く長く残つてゐたのである。然しまあそんな事が無いとしても

宜い、タチヤナを愛しも何もしなかつたとして置いても宜い。兎に角アレクシスを殺したのは、單に自分の力を試して見たかつたのだとして、何が悪い。其癖諸君は、あの命を危くしてさへも、單にまだ誰も登らないといふだけで、高山の頂を踏破る人を是認するでは無いか。これを狂人とはいはぬ。前世紀の一大偉人ナンセンを狂人とは眞逆言得まい。而して人間の精神界にも亦極がある。自分は其兩極の一に達しようとして試みたのである。

嫉妬、復讐、利益等、所謂意味があると人の常に考

へる馬鹿馬鹿しい動機が、此際少しも見えないのを、諸君は頻に訝かしかるが、して見ると、學者と言はれる諸君も亦、あの大事業を狂氣の沙汰と呼ぶ愚衆と共に、ナンセンを非難する事になりますぞ。

自分の計畫……あれは異常だ、獨創だ、横風なくらゐ大膽不敵である。然し自分の標置した目的から見れば決して狂氣では無い。先によく論理正しく説明した如く、伴を好むわが傾向が此計畫を建てたのである。成程精神は興奮してゐたに違無い。然しそれでは天才は皆狂氣か、成程落着いて

もゐた。——然し人殺は是非震々もので蒼ざめて踏
跟ねばならぬとは限るまい。臆病な奴はいつでも
震へる。小間使を口説く時でもさうだ。勇氣即ち狂
氣でもあるまい。

自分の精神の健全は斯の如く容易に説明が出
来る。眞の藝術家の如く、其持役にぐつと打込んで
了つて、其扮する所の人物と合一した其瞬間に人
格が没したのである。毎日面を蹙めてオセロを勤
めてゐる俳優の中には、時に眞の人殺を爲たく思
ふ者が全く無いと断言は出来まい。

これで説明は十分だ。諸君、さうでは無いか。然し
一寸奇體なのは、自分は狂氣だと證明すると、いか
にも正氣のやうに思はれ、正氣だと證明すると眞
に狂氣の如く見える事である。

うん、それは諸君が自分を信じて呉れないから
だ……然し此方も御同様だ。實は自分で自分を
信じてない。何故といふに、心の中のどれを信じて
宜いか解らないからだ。なに、あの臆病な働の無い、
誰にでも服従する奴隸のやうな心を信じる。あんな
奴は靴でも磨かせるが宜い。昨日迄はわが親友、

わが神と仰いたものを、嗚呼無能なる憐な心だと
つく玉座を下りろ。

さて諸君、自分は狂氣か、正氣か。

わが親愛なるマアシア御前だけは此方の知らない
事を知つてゐる。一つ誰に助けて貰はうか。おい、教
へて呉れ。

マアシア御前の返事はよく知つてゐる。然しそれ
をきくのでは無い。お前は實に好い女だよ。然しマ
アシアは物理学を知らぬ、化学を知らぬ、芝居を覗い
た事も無い。今吾等が載つかつて居て、他に物を遣

つたり、貰つたり、用を足したりしてゐる此物が、實
はぐるぐる廻つてゐる事を知るまい。マアシアこれ
は廻つてるよ。人間も一所に廻つてるよ。マアシアお
前は子供だ、馬鹿だ、草木同然だ。お前を羨やましく
思ふだけ、それだけ輕蔑してゐるぞ。

いや、マアシアお前には返事が出来まいよ。なに、何
も知らないつて、嘘を付け、質素なお前の家の暗い
隅にはお前に大事な誰だかあるだらうが、自分の
室には何も無い。久しい前に死んで了つた墓の上
に立派な石塔を建て、遣つた。マアシア、死んで了つ

だ。よ。死。ん。で。了。つ。た。よ。も。う。決。し。て。生。返。つ。て。來。な。い。
ん。だ。

時に、諸君、一つ訴へなければならぬ。うるさく言
つて諸君を煩はすのは濟まないが、親父の諂諛を
眞似て言ふと、諸君も「學術の代表者」だ。諸君は本
を澤山持つて居る。思想は明晰で、正確で、錯誤が無
い。勿論諸君の一半は或説を持ち、他の一半は他の
考があるだらう。然し第一説も第二説も自分は同
じやうに信じる。唯何とでも宜いから説を吐いて
呉給へ。さて茲に面白い、素敵に面白い事實がある。

聰明な諸君には参考になるかも知れぬ。

風の風いだある。静かな晩、此白壁の室の中で、マ
アシアの顔に一種恐怖の色が見えた。驚愕の色だ。恐
しい力に壓服される様子だ。やがて出て行つた。自
分はまだ寢亂して無い床の上に腰を掛けて、何を
爲て見たいのだらうと考へた。所が實に奇體な事
を爲てみたいと思つた。ドクトル・ケルジュンツェフは
咆えてみたいのだ。大聲を上げるのでは無い、唯他
のやうに咆えてみたいのだ。着物を裂いて、身體を
引掻きたい。襦袢の襟に手を掛けて、始は、そうつと、

そこで急に強く上から下へひつさばきたい。そこでこのドクトル・ケルジュンツェフは四足で這つてみたいのである。周囲はしんとして、絮のやうな雪が窓硝子に滑つてゐる。遠からぬ所で、マアシアの静な御祈禱が聞える。さあ、此いろんな爲たい事の中で、どれを擇ばうか。咆えれば音がする、外聞が悪い。下着を裂けば、明日になつて眼付る。かういふ風に段々研究していつて、終に第三の希望を擇んだ。這ふ事にしよう。誰にも聞えまい。若し人が來たら扣鈕を落して、探して居る所だと言へば宜い。

どれにしようかと選擇してゐる内は、気分が良かった。愉快と言へるくらいで、少しも恐を感じずに、何でも手足を動してゐたと記憶する。所が急に思出した。

何故這ふんだらう。さては愈々気が狂つたか。忽ち恐怖は襲來て同時に種々な事をしてみたくなつた。咆えたい、這ひたい、引搔きたい。腹はむしやくしやする。

— 貴様這ひたいのか—と尋いて見たが、黙つて居る。もう這ひたく無なつた。

—おい、おい、這ひたいか—と攻める。それでも黙つてゐる。

—え、そんなら這やあがれ。

袖口を捲つて置いて四這になつた。室の半分程這つた時、自分は其馬鹿げたのに氣が付いて、床の上に座つたまゝ、笑つたにも、笑つたにも、大聲上げて笑つた。

自分は其時まだ人間は物事を知り得る者だといふ習慣の信仰を有つてゐたから、此狂氣じみた願望の源を尋當てたやうに思つた。確に此這つた

り、何かしたいといふ欲望は、自己暗示の結果である。此偽狂といふ強迫觀念が、かういふ狂氣じみた願望を喚起したのだ。實行してみると、すぐに此願望は消える。狂氣で無いのが解る。斯の如くわが推理は單純で合理である。然し……

然し、兎に角自分は這つたのだ。這つたのだ。自分は何たらう。自己を辯護する狂人か。それとも今丁度狂氣になりかゝつてゐる正氣の人間か。

高等學術に精通する諸君よ、助けて呉れ。願はくは其學術の權威を以てどちらかへ此權衡を傾か

して、此恐しい殘刻な難問に解決を與へて下さい。
嗚呼實に待焦れてゐる。

だが實は待つてゐても徒目だらう。嗚呼わが親愛なる諸君、諸君も亦僕と同然だ。同じくかの臆病な間違易い空想に欺される。永久の虚言家である人間の心が、僕同様に、其の禿頭の中に働いてゐるのだらう。僕のが敢て君等のより劣つてゐる譯が無い。諸君は僕を狂人と證明するだらう。すれば僕は正氣だと證明して見せる。正氣だと證明するか。さうなれば否、狂氣だと證明してみせる。諸君は人

殺をするな、盜をするな、それは不道德だといふ僕
は人殺をして、善い、盜をして、善い、それは道德
に背かぬと證明する。君等は考へるだらう、喋舌る
だらう。僕も考へてみせる、喋舌てみせる。君等も僕
も双方理がある。又双方理が無い。嗚呼吾等を裁定
して眞理を發見する判官は何處にゐるのだ。

君等は唯一つ、大きに利な處がある。これのみが
眞理と智識とを與へるのだ。即ち君等は今罪を犯
して居ない、裁判に掛つて居ない。君等は相當の手
當を貰つて、こゝへ招待されて、僕の精神状態の鑑

定をしに來て居る。そこで僕が狂人であるのだ。然し、君、ジエムニツキイ博士よ、人が君を此處へ押籠めて、僕を呼んで來て鑑定させるなら、其時、狂人になるのは君である。僕は豪い人になる。鑑定人になる。虚言家になるだらう。唯此虚言家が他のと少し違ふ所は宣誓をして嘘をつくといふ事だけだ。成程君は人殺もせぬ、盗む爲に盗もせぬ。君は狂人では無い。然し突然飛んだ事が起らぬとも限らないぞ。

忽然として明日、否、今日にも、否、此文を讀んでゐ

る瞬時に、厭な無用心極まる考が君にも起る。即ち自分も若しや狂氣では無いかといふ考へさ。ジエムニツキイ博士、これはどうです。いや、君が狂氣になるなんて、勿論馬鹿げきつてる。が、然し、御注意はなさい、そんな考は放逐し給へ。君は牛乳を飲んでゐる。純良の牛乳と思つて飲んでゐる。一朝人が來て、これはいかん、水が割つてあると言ふ。其時からして、勿論、君には牛乳といふものが無くなるのだ。君は狂人だ。手をついて這ひたくありませんか。無論、這ひたくは無い。何で正氣の人にそんな事が

あらう。然し、ねえ、君の心の奥の方で、ちよいと、實に
 小供じみた心が起りませんか。椅子から滑落ちて、
 少し、極く少し這つてみたかと思ひませんか。素より
 君にそんな事は起りつこ無い。今茶を喫んで、女の
 對手をしてゐた正氣の男に、何でそんな考が出よ
 う。然し、君、ね、それ、手足に――それ、つひ今迄にそんな
 感じが無つた――膝の所が何だか妙になるでせう。
 骨節を伸して居ようとする心に逆つて、重たい麻
 痺を感じませんか。
 實にジユムニツキイ君、君が若し自分で這ひたく

思へば誰がそれを禁められよう。

誰も禁められぬ。

然し這ふ前に少し待ち給へ。まだ用がある。僕の
 奮闘はまだ了はぬ。

去年の秋の麗らかな日に、ふとかういふ光景を見た。綿入の外套を着て、薔薇色の頬と小さい鼻の先ばかりを見せる、帽子を被つた女の兒が脚の細い小犬に近づいて行く。犬の口は細長い、尻尾は恐ろしく脚の間に挿んでゐる所が女は何か驚いて、急に振向いたまゝ、白い球のやうになつて、保姆の方へ轉げていつた。泣きもせず、涙も出さず、唯頭を保姆の袴の中へ隠した。小犬は可愛らしくも眼をばちばちして尾を振つてる。保姆は人相の好い、質樸な

女であつた。

——恐くはありませんよ——と保姆は言ふ。其無邪氣な、さも好き、うな顔は一面の笑であつた。

どういふ譯か、自分が自由の身であつた頃、サギエロフを殺す計畫の最中、度々此畫を眼の前に浮べたものだ。さて此秋晴の日に、此優美な一群を見て、一種異様の感を起した。これで或問題の解決が付いたやうな心持がした。其時企て、居た人殺の計畫は他界から來た冷たい虚偽、意味の無い大悪事のやうに見えた。犬も少女も優美で小さくつて、

可笑しいほど互に恐がつてゐる。それに日が肝々
 さしてゐる事が如何も單純で、さうして深い美し
 い智慧に充ちてゐる。この二生物の結合に、正しく
 人生の謎の解決が含まれてゐるとても言へさう
 だ。これが其時の感である。一つこれはよく考へて
 見なければならぬと其時思つた。然しつひに考へ
 て見る暇がなかつた。

鑑定人諸君、まだ色々大切な事が支へてゐるの
 に、何故こんな詰らぬ無駄話をしたのだらう。自分
 にも解らぬ、早く結末をつけねばならぬ。

死者をして平和ならしめよ。アレクシスは死ん
 だ。疾に腐れかけたらう。もう世に存在して居無い。
 —どうにでもなれ。死者の状態には何と無く愉快
 さうな所がある。

マチヤナ・ニコライエヴナの事ももう言ふまい。
 あの女は不仕合だ。自分も喜んで世の同情に與す
 る。然しこのドクトル・ケルジエンツフの今心に感じ
 てゐる不幸に比べて、あの女の不幸が何だ。世上愛
 する夫を失つた妻は多い、これから失ふ可き妻も
 多い、彼等をして靜に泣かしめよ。

然し此腦の中には……
 諸君、諸君は此複雑な事情を理解されるだらう。
 僕は世に自分を除いて好きなものが無い。自分と
 いつても此醜い肉體は好かぬ。——餘程お目出度い
 人が肉體を好くのだらう。——自分はわが人間の心
 を愛する、わが内心の自由を愛する。わが心よりも
 勝れたものは、まだ見たことが無し、今も見ない。自
 分は之を神と仰いでゐる。——實に神として仰ぐ價
 値があるでは無いか。全世界と其誤謬とにむかつて、
 巨人の如くに奮闘してゐるでは無いか。心は人

を高山の巔に導いて、下界遙に人間が其卑しい動
 物性の情慾や生死の永久の恐、寺院彌撒感謝祭と
 共に蠢動してゐるのを見せるのである。
 僕は實に偉大で自由で幸福であつた。中世の城
 主が鷲の巢のやうな難攻不落の城塞より得意尊
 大の感に誇つて足の下の平原を瞰下した如く、自
 分は頭蓋骨といふ墻壁の後なる城の内から、何物
 にも打克れまいと勝誇つてゐた。自分は自己の主
 にして、やがて全宇宙の主であつた。
 所が全然欺されたのである。心は不忠にも女が

欺すやうに欺した。わが城はわが牢となつた。敵は城内から襲來した。どこに援助を呼ばう。わが城の攻め難く、其壁の厚いのが却て身の仇、わが聲は外へ達かぬ。誰かあつてわれを救ふ。誰もゐない。われより強い者が無いからである。われだ、われだ、わが『我』の敵はわれだ。

不忠の心は自分を欺した。心を愛し心を信じて、自分は欺されたのである。心は衰へてゐない。明晃々として鋭い劔の刃の如く靱ふ。然し其鏢は今手の内に無い。而してわが心が其生の親のわれを殺す所が宛も自分が人を殺した時のやうに冷淡である。

日は暮れきつた。狂亂の恐に身も世もない。自分は確と直立して足は堅く土の上を踐まへた。自分は今無限空間の茫漠たる中に投げられてゐる。寂寞は廣大無邊にして人を威嚇し、前に後に四方に空虚の深淵は口を開いてゐる。寂寞は物凄、この生物の我、この感じ且つ考へる我、このわが愛する唯一の我は其小を感じ空を感じて心細さ限も無く、今か今かと消失せるのを待つばかりだ。寂寞は

恐しい。自分は自身の極小部分に過ぎぬ。われとわが心の内には峻厳無言神祕して我を碎かん勢の敵が取捲いてゐる。自分は何處へ行くとも此敵を逃れ得ないで、宇宙の空虚中に友も無い獨ぼつちの自分である。寂寞は物狂はしい。自分で自分が解らなくなる。わが唇わが心わが聲に依つて語るものはわが敵の彼等である。

とてももう斯うなつて生きてはゐられない。而も世間は今寢靜まつてゐて、夫は其妻を抱き、學者は自ら教へ又人を教へ、貧者は一錢を投げられて

喜ぶ。狂なるを知らずに樂む狂人の世よ、爾の覺醒は恐しいものだらう。

如何なる強健の人が僕を援けに来るだらう。誰も來まい。此孤獨な憐な絶望沈淪した「我」を提げて僕が跪く可き永遠の或物は何處に居る。居ない。居ない。嗚呼可愛い可愛いわが少女よ。何故此血に塗れた僕の手が君の方へ向くのだらう。——さうだ。君も亦人間だ。憐なものだ。どうせ死ぬ者だからであらう。僕が君を憐れむのか、君が僕を憐れむのか。知らないが、何しろ僕は君の細い小さい體を墻壁

にして其後に隠れて、時間空間の恐しい虚無から
遣りたいと思ふ。嗚呼、然し皆嘘だ、嘘だ。

鑑定人諸君、諸君に非常な御願がある。諸君に少
しでも人情があるなら、此願は協へて呉れるだら
う。もう諸君と僕とはよく互に理解してゐて、誤解
は無い筈だ。諸君が法廷で僕を正氣だと宣言して
呉れと頼んでも、僕は後で諸君の言を信じるとは
受合はぬ。次の問題は如何なる人にも解けないと
とにかく僕は思つてゐる。

自分は殺す爲に狂氣を眞似たのか。それとも狂
氣だから殺したのか。

然し裁判官は諸君の言を信じて、僕の行きたい
所即ち監獄へ僕を送るだらう。どうか此所は誤解
の無いやうに願ふ。自分はサギエロフを殺したの
を少し後悔しない。罰を蒙つて罪を贖ふとも求め
ぬ。若し僕の正氣を證明する爲に復人殺や盜が必
要なら、進んで人殺もする。盜もして御目につけよ
う。僕が監獄へ行きたいといふのは全く他に理由
がある。何だ、自分にもよく解らない。
自分は漠然とした望で、監獄へ行きたいのだ。人

間の法律を犯した殺人犯や盜賊の中へ入つて、こ
 れ迄知らなかつた生命の源を發見し、それでわれ
 とわが友に復なりたいのである。また望に欺され
 ても宜い。何でもかでもあの連中に加はりたい。う
 ん、解つたぞ、君等は腰拔だ、偽善者だ、何よりも無事
 平穩が好きな手合だ。麵包を盗んだ小盜を癡狂院
 へ押籠めも仕兼ねない奴等だ。因襲の俗に一指で
 も觸れるくらゐなら、寧ろ全世界をも自身をも狂
 人と認めて憚らぬ手合だ。うん、解つてるぞ。罪と罪
 人と、これが君等の絶えぬ苦勞だ。これは底知らぬ

淵より上る脅迫の聲で、君等の道德上道理上の生
 活を容赦無く非難するものだ。止せ、如何に耳へ綿
 を支つても徒目だ。どうしても聞えるぞ。何しろ僕
 は彼方へ行きたい。このドクトル・ケルジエンツェフ
 は君等の恐がる大軍の隊伍に加入して、君等に對
 する永久の非難となり、答を求め、答を待つ者にな
 つて見せよう。

僕は情狀酌量を願はぬ。唯一言、正氣だと言つて
 貰ひたい。さう言はなければ、虚言家だぞ。若し君等
 が其博學の手を洗つて、僕を癡狂院へでも押籠め

たり、又は放免でもしたりするなら、今から豫告して置く、非常な不愉快を與へますぞ。

自分に取つては世に判官は無、法律も無い、何事も禁じられて居ない。凡ては許されてゐる。諸君、此處に一つ、引力の法則も無く、上も下も無く、凡てが偶然と空想とに支配されてゐる世界があると想像し給へ。われドクトル・ケルシエンツェフはこの新世界である。自分には凡てが許されてゐる。このドクトル・ケルシエンツェフはそれを立派に證明して見せようか。即ちこゝで正氣の眞似を爲る。やが

て自由の身になる。それで一生かゝつて研究するのだ。自分は書籍に取巻れて、君等の大得意の學術の髓を奪つて、久しく世の熱望する一大必要物を發見して見せよう。それは一種の爆烈藥だ。世のまだ曾つて知らぬ強烈なものであらう。ダイナマイトよりも猛烈に、硝酸グリスリンよりも更に猛烈に、人間の想像以上に猛烈なものだ。自分は才がある、執拗だから終には必ず發明する。さうして之を發明した其曉には神ばかり多く居て、唯一永遠のひとりの神が居ない。此咀はれた全地球を空

間に飛散させてやらうと思ふぞ。

これはもと……

—

金持の商人ラウレンチ・ペトロギチは、獨身で、別にかうといふ家族も無いから、病養のため莫斯科へ出て来た。頗る變つた病症といふので、大學の病院へ入る事になつた。支關の受附の處へ、裘の外套と革靴とを預けて置いて、案内されるまゝ、二階の一室へ行く。そこで着物を剥がれ、襯衣を脱がされて、代に着せられた鼠色の患者服には、八號室と

硝酸銀で焼付けてあつた靴の代に上靴を貰つたのは可かつたが、何分御授の襯衣が小さ過ぎるので、看護婦は、他を探しに立つて行く風呂場で着物を着換へてゐたのだが、看護婦は、そこを出て行きながら、驚いて、——まあ、大きな方ね。

ラウレンチ・ペトロギチは、半分裸になつたまゝ、穏順しく辛抱して、看護婦の歸りを待つてゐた。大きな禿頭を下げて、老婆の乳のやうにだらりとした自分の胸廓や、風船のやうに脹れた下腹を見結めた。故郷のサラトヴでは、土曜日毎に湯屋へ行つ

て、其時、自分の裸體を見慣れてゐたが、今この寒氣立つて粟粒の出来てゐる黄色のぶくぶくした皮膚を見みると、まるで始めてのやうな心持だ。一體が丈夫さうで、がつしりしてゐるから、尙更身窄らしい。實は、通例の着物を脱がされた時から、身體の調子が變つたやうなので、自分で自分の身と思はれない。人が言付けければ、何でも直に遣りさうになつた。

看護婦は、やがて襯衣を取換へて來た。ラウレンチ・ペトロギチはまだ指一本の力で、此女ぐらゐは

倒せさうであつたが、埒も無く言ふ事を聞いて、着物を着換へさせ、又看護婦が襯衣の頸の紐を結へて了ふまで、穏順しく腰を屈めて待つてゐた。それが濟むと、今後永く自分の臥る病室へ導かれた。熊のやうな、どつしりした足取で、怯ぢ怯ぢしながら緩つくり歩いて行く處は、折檻されに父親の後から隨いて行く小兒のやうだ。今度の襯衣も矢張窮屈だ。歩く度毎に肩の處が緊つて、びり、びり、といふが、どうもさうと看護婦に言ひ悪くかつた。これが故郷サラトヴの家で、一晩に、十人の店の者の

戦慄させた人かしら。

—— さあ、こゝですよと看護婦の教へたのは、いやに背の高い、小さい寢臺だ。小さい卓子が其傍に据ゑてある。室の隅に片寄つて狭苦しい處だが、世に倦んだ人たちには悪くならう。おどおどして、手速く音も立てずに、ラウレンチ・ペトロギチは上衣を脱ぎ、股引を外して、床に就くや否や、つひ先程迄氣になつたり心に懸つたりした萬事が忽ち全く消散して、どうでもいゝ餘所事のやうになつて了つたのは不思議である。すると今度は、過ぎ越方

の一生が畫のやうになつて、突然と而も判然と記憶に浮んで來た體の力、心の力、兩つながらを日々削いで行く病勢の用捨しない進行、又は強欲の甥たちに取巻かれて虚偽と憎悪と恐怖との空氣中に孤立する獨ぼつちのわが身の上を考へて、それが嫌さに逃げだして、面白く無い旅をはるばる莫斯科へ來た事に思到ると、忽ち幻は消失せて、どんよりした悲愁がぼうつと心を塞いで來るので、もう考へる事は廢にして、寢臺の整然としたのやら、室中の空氣の新鮮なのを心地好く味つて、眠入

つて了ふと、半は閉ぢた暈の前、日影華やかに射込んで、寢臺の向の、白い壁の上を照してゐる。

翌日、此患者の枕元に黒い鐵板が掛つた。其表には、ラウレンチ・ペトロギチ、商人、五十二歳、二月二十五日入院と書いてある。同じやうな板は、此八號室に居る他の患者二名の寢臺にも掛つてゐた。其一つには、フィリポ・スベランスキイ、助祭、五十二歳、もう一つには、コンスタンチン・トルベツキイ、學生、二十三歳とあつた。白墨で書いた文字は、黑板の上に鮮やかに浮上つて見えて、仰向に臥てゐる病人が眼